

梅原猛生誕百年記念フォーラム ——これからの梅原猛

20250509更新

司会

ただいまより「梅原猛生誕百年記念フォーラム——これからの梅原猛」を開会いたします。

私は梅原記念財団事務局の和泉と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

本日は春分の日ですが、この3月20日は梅原猛先生の誕生日なんですね。ちょうど今日が百歳のお誕生日。記念すべき日です。

私自身、学生時代からの梅原ファンで、仕事においてもさまざまにご恩とご縁をいただいた者ですが、会場にお越しいただいた方々、後ほど壇上に上がっていただく先生方、そしてオンラインで全国から、梅原先生の愛読者や警咳に接した多くの方々が一堂に会して梅原猛、梅原哲学のこれからの語り合おうという趣向です。そして本日を機に、先生が残された梅原記念財団が活動をスタートする、そういう日でもございます。

それでは開会に先立ちまして、梅原記念財団代表理事梅原賢一郎より一言ご挨拶申し上げます。

■ご挨拶 梅原賢一郎

代表理事の梅原です。よろしくお願いいたします。

今日は2025年3月20日です。ちょうど百年前、1925年3月20日、梅原猛は仙台で生まれました。1世紀が過ぎたことになります。その今日のこの日、梅原記念財団はここ京都の地に誕生します。プラトンの『国家』の中で、死後、百年ごとに生まれ変わるという神話が語られますが、梅原猛の生まれ変わりのように、梅原記念財団は、いま、ここに、産声を上げます。

梅原記念財団は、「梅原猛とは何であったのか」という問いとともに、出発します。梅原猛の不動のポートレートがあるわけではありません。カッコイイとっておきのポーズがあるわけでもありません。梅原猛は単なる自叙伝でもありません。単なる標語でもレッテルでもありません。

梅原猛は、むしろ、断片です。あるいは、断片を拾い集めた束にしかすぎません。

梅原猛は「人間中心主義」を批判しました。「人間中心主義」とは、人間を自然の主人、支配者とする思想です。

子供のころ、ドジョウすくいやセミとりに明け暮れた梅原猛は、生涯、「人間中心主義」になじめませんでした。

生きとし生けるもの、みな「いのち」であり、ともに「大生命」の息や声の一コマ一コマでした。

梅原猛は、縄文、アイヌ、沖縄、アニミズムに関心を向けました。それも、生きとし生けるものと共に生きる作法、生きるエチカ（倫理）のありようを見届けようとしたからにはほかありません。また、東洋思想、とくに、大乘仏教に分けいりました。それも、「人間中心主義」に染まらない森羅万象のたたずまいの理法を見定めようとしたからにはほかありません。

さて、大乘仏教の理法といえば、「一即一切」「一切即一」、いわゆる「華嚴の理法」を思い浮かべることができます。先に、梅原猛は断片であるといいました。

それを、華嚴の理法を用いて言いますと、「杜の都」仙台で生まれた梅原猛は「森」です。知多半島の内海の青い海で泳いだ梅原猛は「海」です。『地獄の思想』を書いた梅原猛は「地獄」です。『笑いの構造』を書いた梅原猛は「笑い」です。

結婚をして、湯に浸かって二時間も思索に耽っていた梅原猛は「五右衛門風呂」です。立命館大学に勤めていたとき、応援団部の顧問をしていましたが、野球の試合に勝っても負けても、応援団員たちと肩を組んで、応援歌を歌った梅原猛は「グレーター立命」です。京都市立芸術大学の学長をしていたとき、キャンパスには、決して猛犬ではない、下がり眉毛をマジックでいらずに描きされた犬が飼われ、学生たちは「たけし」と呼び捨てにしていました。梅原猛は「犬」です。そして、日文研（国際日本文化研究センター）の設立がいよいよ決定した夜の東京の祝いの席で、感極まって、「明日は東京に出てゆくからは、なにがなんでも勝たねばならぬ」と、村田英雄の「王将」を歌った梅原猛は「将棋の駒」です。

そして、梅原猛は、それに同化せんとばかりに食い入った、「柿本人麻呂」であり「世阿弥」であり「円空」です。

また、京都に出てきて、終始、その麓に住み、猛獣がいかにか咆哮しようとも、こだまとなって、絶妙な声を投げ返したであろう、北は延暦寺から、南は平等院にいたるまで、名立たる寺院が薨を並べる、大乘仏教の「錦の帯」がごとき、「東山三十六峰」です。

そして、〈猛〉を出産しすぐに身罷った生みの「母」です。

「よけいなことをいうな」父の声が聞こえてきます。

この記念の日に、父が、どこかで、微笑み、見守ってくれていることを、ただただ、祈るばかりです。

きょうは、大勢のかたにお集まりいただき、ありがとうございます。また、ご登壇いただく先生方に、心より、感謝を申し上げます。そして、最後に、「生誕百年記念フォーラム」開催にむけて、労をとっていただきました、すべての関係者の皆様に、感謝を申し上げ、私の挨拶とさせていただきます。

司会

それでは、ご来賓を代表してご挨拶をいただきたいと思います。国際日本文化研究センター・現所長の井上章一先生、どうぞよろしく願いいたします。

■ご挨拶 井上章一

ご紹介にあずかりました、国際日本文化研究センターの所長を務めております井上章一と申します。私が梅原先生と最初に出会ったのは、日文研設立のときでした。当時、人文諸学の学会が、日文研の設立に対して非常に強い抵抗感を示していました。日本を力強く世界へアピールする、とんでもない“民族主義の研究所”ができる。どうやら初代所長には梅原猛が想定されているらしい。きっと梅原思想を世界へまき散らすための研究機関に違いない。あんなところに研究の自由はない。そういくつもの学会が声明を發表しました。

私はそういうところに設立当時から勤めたわけです。その後、日文研ができることに思想的な危うさを見た諸学会の人たちも、日文研の共同研究に集まるようになりました。そして私の気ままな、好き勝手な研究に苦言を呈する人も出てくるようになりました。「君の研究は本当に勝手気ままだな。そんな自由奔放な研究を許しておいていいのか？」と。

いいですか？ 日文研などには自由はありえないと言い切った人たちが、私の自由気ままな研究を非難するようになっていたんですよ。私はいま振り返って思います。

梅原先生はたぶん私のことを、危なっかしいものを見るような目でご覧になっておられたと思いますが、ただの一度も「君、ちょっとやり方を改めたまえ」のようなおっしゃり方を聞いたことがありません。私はいま私が勤めさせていただいている研究所は、本当に研究の自由が担保できている、素晴らしい組織だと思っています。これを壊しては、梅原先生に申し訳ないと心の底から思っております。

今日はそんな梅原さんを振り返る場があると聞き、喜んでまいりました。目の前に元所長もいらっしゃるし、私がお世話になった研究者もいらっしゃいます。

ちょっといま恥ずかしい気分です。ここに立ってるんです。みなさん、今日この集いを十分エンジョイしてってください。どうも拙いスピーチでした。（拍手）

司会

ありがとうございました。それでは始めます。まずは記念講演です。

山折哲雄先生、演台の方へどうぞ。みなさん拍手をお願いいたします。（拍手）

山折先生は梅原猛先生、河合隼雄先生に続き、国際日本文化研究センターの第三代所長を務められました。御年93歳。「いまこそ梅原猛を語らなければならない」と、駆けつけてくださいました。

演題は「梅原猛——その哲学と人生」です。どうぞよろしくお願いいたします。

■記念講演：「梅原猛——その哲学と人生」山折哲雄

「おまえさん、全共闘の流れだろう」

座ってお話をさせていただきたいと思います。お許しをいただきたいと思います。

私が初めて梅原先生にお目にかかりましたときから、ほぼ半世紀の時間が経ちます。最初に参りましたのは、確か三島由紀夫が自決した、その直後だったと思います。初めて、梅原さんがお住まいだったお家を訪ねまして、すぐに仕事場に通されました。8畳ぐらいのお部屋でしたが、その部屋いっぱい、さまざまな本、雑誌、写真集、絵画集等々の大小さまざまな本を、見開いたまま並べておりました。しかもそれが私の目には乱雑に見えました。

で、そのちょうど真ん中にお一人座って私を手招きして「ここに来い!」。足の踏み場もない本を避けながら、梅原さんの真ん前に座りました。わずか畳半畳ぐらいの空間を手で空けてくださった。

座って話し始めました。挨拶も何も抜きです。その時その場で梅原さんがお考えになっていることを語り始められました。私はただただ聞くばかりでした。私は仕事の内容として企画書のようなものを差し出しましたが、一目見て、それはもう脇に放り捨てて、話を続けておられた。

小一時間もそれが続きましたでしょうか。日が暮れてきて、「さあ、飲みに行こう!」。言われるがままに外に出て、四条通りに出ました。四条の祇園会館というのがありましてね。いま改装中です。あの前に居酒屋の路地小路がございまして、その1軒、「梅鉢」という店、よく覚えてますよ。そこに入りまして、また梅原さんはその時、その場で考えていることを語り始めました。真夜中になってしまいました。酔いが回ったころです。私の顔をじっと見つめて、「おまえさん、全共闘の流れだろう」こう言われた。

私は当時、東京の出版社に勤めておりました。ある企画を立てて、その責任者になりましたから、梅原さんに監修者になっていただこうと思って、久しぶりに京都にやってきた。その時、私は頭をすっかり丸めておりました。私が頭を丸めたのは、三島由紀夫が、その出版社のそばの市ヶ谷の自衛隊本部で自決をしたことに衝撃を受けたからです。

その私の姿を見て、「お前さん全共闘だろう」。違うんですね。全共闘には入ったことはありません。デモや集会には多少参加したことがあります。しかし、私は弁解をしませんでした。そうじゃないんだと一言言っただけであり、最後の最後の日まで、この最初の印象を梅原さんは捨ててくれませんでした。いまごろ梅原さんはまだあの世で、私を全共闘の流れだと思っているかもしれません。

語る哲学

その後、お亡くなりになるまで、ずっと梅原さんにお目にかかり続けてきたわけですが、その間、私は梅原さんが書斎におられた姿を見たことは一度もありません。原稿用紙に向かって筆を走らせている姿を見たこともありません。どうしてだろう。やがて、口述する梅原さ

んの噂があちらこちらから聞こえてきました。口述？ ちょっと不審な気持ちになっておりました。なぜ口述なんだ。なぜお書きにならないんだ？

もちろん、口述原稿に繊細な朱を入れることはなさっておられる。でも出発点が口述なんです。やがて気が付きました。ああ、梅原さんっていう人は、考える、そして語る、そういう哲学を目指しておられるのかもしれない。書く、記述する哲学ではない、語る哲学だと。

イエスが語ったように、ブッダが語ったように、孔子が語ったように。彼らは書いてはおりません。ブッダの語ったことを書いたのは弟子たちです。イエスが語ったことを文字にしたのは弟子たちです。「子曰〔のたまわ〕く」であって、孔子も書いていない。

そう確信したわけじゃありません。私は、ひょっとすると梅原さんという哲学を志向した人間は、本来的に、語りから出発した方だ。これはだんだん、梅原さんという人間を知る上で極めて重要なことではないのか、と思うようになりました。

わだばゴッホになる（棟方志功）

転機がまいりました。それは、私が東北、岩手の地で育ったという経験と関係があるかもしれません。梅原さんもお生まれは隣の宮城県仙台であります。私が転機になった人物、梅原さんの人間を理解する上で、これはキーパーソンかもしれない、と思った人がおります。それが棟方志功であります。岩手県よりさらに北の青森県青森市の出身者。貧しい刀鍛冶の子どもであります。その棟方志功の、人生って言いますか、それを調べて、彼の作った数々の作品を見ているうちに、彼がものづくり、芸術の世界に目を開かれて家出をするわけではありますが、気がついたことがあります。

彼が家を出る時に言った言葉「わだば（私は）ゴッホになる」—この言葉ですね。これが私を撃ちました。まだそのとき、棟方志功が梅原さんに似ているとまでは思っておりましたが、この「わだばゴッホになる」というセリフが、やがて私には、「俺は“ゴッホのような”芸術家になるのではない。“ゴッホそのもの”になるんだ」という言葉だと思うようになりました。

はじめ棟方志功はほとんど世間に認められなかった。ところが、「釈迦十大弟子」、みなさんよくご存じのあの作品を戦前に作っていたんですが、これが戦後になって、サンパウロで行われたビエンナーレでグランプリを取った、たちまち“世界の棟方”になりました。

そのあとの彼の生涯は皆様ご存じの通りであります。彼の才能を見いだしたのは柳宗悦、あるいは河井寛次郎とか浜田庄司らの陶芸家、それから梅原龍三郎、安井曾太郎といったそうそうたる画家たちでした。ところが、最晩年になって死ぬ直前ですけれども、棟方は自伝を書いている。自伝をめぐるいくつかのエッセイを書いており、その中でこういうことを言ってる。自分の恩人とも言うべき偉い人々はたくさんおいでになる。そのおかげで自分は、世に出て世界の棟方と言われるようになった。だけど、例えば、梅原龍三郎先生、安井曾太郎先生、このお二人の先生は私の恩人であるけれども、要するに西洋人の模倣にすぎないではないか。こう切って捨てております。そうでしょう。自分は「ゴッホになろう」としたんだから「ゴッホのような芸術家」になろうなんて初めから思ってなかった…ということにはっと気がついた。

俺が西田幾太郎になる

私は梅原さんにお目にかかってからしばらくして、幾度となく「自分が京都に来て京大の哲学を志したのは、西田幾多郎先生に心酔していたから」こう言っておられました。その時思いましたね。

もしかすると、梅原さんが西田幾多郎の哲学を学ぼうとしたのは、西田幾多郎“のような”哲学者になろうとしたのではなかったのかもしれない。「俺が西田幾太郎になるんだ」そういう野心、そういう抗いの気持ちが最初からあったからではないか、と。

以来、その私の考えは変わることがありませんでした。梅原猛は、西田幾多郎になろう、そう思っていたに違いない。その段階で、梅原さんという、ものを考える人間は、哲学、芸術、あるいは宗教、あるいは他の諸科学、その区別を取り払っていた。時代別、分野別、そういう専門家のどこかに入ろうなどとは毛頭思っていなかったのではないのか。それとともに、棟方志功という人間を鏡にして、梅原さんの全身の中に縄文という問題意識が芽生えていたのではないのかと考えるようになったのです。

ここは怪しいところですがけれども、梅原さんは宮城県の出身。私はその北の岩手県で育った。棟方志功はさらにその北方の青森、北方文化、縄文文化という問題意識がもうすでに梅原さんの全身に満ちあふれていた。

晩年になって棟方志功は円空に心酔するようになります。たまたま名古屋で行われていた円空の大展覧会に一緒に行った保田與重郎さんが、そのときの印象を書いているんです。会場に入って、眼前に並べられている円空仏に棟方志功は近づいて行った。そしてあの鈍彫りの像にからだを寄せて、頬を寄せて、「ここに志功がいる」と叫んだ。わだば円空になったんですね。

その後、私は不思議なことに気がついた。棟方の最高傑作は、しばしばあの版画「釈迦十大弟子」だと言われている。いくど繰り返し見たかもしれない、個展に足を運んだかもしれない。あれね、十体の仏弟子の像が刻まれております。ところが、肝心かなめの釈迦の像がないんですよ。「釈迦十大弟子」っていうのは釈迦と十大弟子ではない、釈迦の十大弟子、釈迦は切って捨ててるんですよ。「あっ」と思ったときです。どこかでこれは聞いたことがあるぞ、と。

『臨濟録』。中国の禅僧の語録を集めたもので、アジアにおける古典的な書物。当時の修行僧たちにとってバイブルのような書物です。『臨濟録』—それを棟方志功はおそらく河井寛次郎に教えられたのではないかと思いますけどね。

その『臨濟録』の中にこういう言葉がある。「師に逢うては師を殺し、主に逢うては主を殺す」「仏に逢うては仏を殺し、祖に逢うては祖を殺す」。師や祖を乗り越えていけ、ということですね。棟方志功がどれだけ仏教の世界に通じていたかどうかはわかりません。しかし、『臨濟録』が放つこの言葉は、必ずや棟方志功を深く、強く、激しく、動かしたのではないのか。

そのイメージが梅原さんに重なったんです。俺は西田幾太郎になる。そのために殺すべきものは殺す。そういう覚悟のようなものが、梅原さんのあの柔らかかで、包容力のある人格の底に、ずっと底流していた、と思うようになりました。

怨霊史観の成立

梅原さんが世に出た最初の作品がご存じのように『隠された十字架』。主人公は聖徳太子で

あります。悲劇的な最期を遂げた悲劇の帝王。しかも、天皇になることができなかつた未完の王ですよ。それが、なぜああいう無残な死に方をしなければならなかつたのか。

私なりにまとめると、そういうことになるんです。あるとき、私は梅原さんに聞いたんです。「なぜ先生の最初の傑作・大作が聖徳太子なんですか。ほとんど史実と言われるような確たる証拠はないじゃありませんか」。

専門家の多くはみんなそう言っていた。家永三郎、井上光貞、石母田正、そうそうたる古典古代史の権威をはじめ聖徳太子の実在性をいろいろな形で疑っている。今日の歴史学者で、聖徳太子の実在性を信ずる人はどのくらいいると思います？ あれは、架空の人物だった、実在しない人物だったと考える人がどんどん多くなっています。そういうことも含めて、梅原さんに「なぜ聖徳太子だったんですか？」と聞いたことがある。言下にお答えになりました。

「だからこそ俺は聖徳太子を選んだんだよ。聖徳太子以後、あらゆる日本の古代から近世に至るまでの太子関連の書物を読むと、そこに、太子にまつわる不気味な話が次から次へと出てくる。太子の怨霊、御霊、死霊、生き霊、もののけ。わけのわからない、見ることのできない、そういうものが太子の生涯にわたって次から次へと出現する。だから選んだんだよ。人間の怒り、恨み、悲しみ、慟哭、そういうものが次から次へと積み重なって、史料という点では、最大の史料を我々に残してくれているじゃないか」

「ああ」と思いましたね。「時代を動かすもの、人間を深層において動かしているもの、それがこの怨霊、もののけ、そういうものだよ。考古学的事実、歴史的な事実、古文書的な断片、それで世界の変化、時代の変化、人間そのものを動かすことができると思うのかね」。まいましたね。その通りだと私は思いました。

怨霊、もののけ、そういう目に見えない不思議な、怒りと悲しみと恨みを結集したような、凝縮したようなものこそが時代を動かす。人間を動かす。だから、あの『隠された十字架』は、どの分野にも属させること、属せしめることができないような作品として世の中に出た。だから、右翼からも左翼からも、あらゆる方面から攻撃され、批判にさらされたんです。しかし、大衆、多くの読者の心を引きつけ、今日まで読み継がれてきた。怨霊史観の成立ですね。

ニーチェのルサンチマン論

地中海世界の哲学者で、これと同じような考え方をした、ニーチェという人物がおりました。おそらく梅原さんの哲学者としてのキャリアの中では、一番影響を受けられた、あるいは共感できた、同時発生的な考え方を持った哲学者として、梅原さんは生涯注目をした哲学者だと思います。そのニーチェの作品のキーワードになった考え方は、ご承知の「ルサンチマン」という言葉であります。これは日本語に翻訳すれば「怨霊」になる。

ニーチェによれば、時代を動かす最大の要因は、差別された者、虐げられた者、弱き者、そういう者たちの怨念、恨み、敵意、こういうもので、こういうものは、結晶して社会的勢力になったとき世の中を変える、時代が変わる。こういう議論ですね。それを展開したのが、よく知られている『悲劇の誕生』です。

ニーチェによれば、原始キリスト教運動も、ロベスピエールのフランス革命も、この「ルサンチマン」によって発生した。こういう議論になると、ほとんど梅原さんのお考えと重なるんで

す。この東西の二人の哲学者の相互影響の関係、それに基づく世界史の理解、これは現代、いまだに有効だと思います。

ウクライナ戦争、パレスチナ戦争、現在のAI・デジタル時代における武器生産、武器供与等々を考えると、ますます梅原猛の怨霊史観、ニーチェのルサンチマンのもつ重大な意味がみえてくる。彼はヨーロッパ世界におけるルサンチマンの根元に探りを入れたんです。ニーチェはギリシャ悲劇を基盤にして考え出した理論なんですが、それに対して梅原さんは日本列島の悲劇の誕生を目標にしていた。その成果の一つ、出発点の一つが『隠された十字架』でした。その思考の鋭さ、そしてそれ以上に今日の世界情勢をひもとく上でも、この二人の仕事は欠かせない重要な意味を現在持っている。私はそう思う。ただ一つだけ、ニーチェのルサンチマン論と梅原さんの怨霊史観は違いがある。それは突き詰めて言えば、ニーチェの『悲劇の誕生』、これは「憎悪の哲学」ですよ。

鎮魂の思想

後にニーチェの考えは超人思想、あるいはナチズムというような思想問題と結び付けられた。しかし、梅原さんの怨霊史観には、ニーチェの暗さはない。なにか明るいです。梅原さんの怨霊史観には「鎮魂の思想」があるから。それではこの「鎮魂の思想」を支えたものは何か、ということになる。

それが次の梅原さんの思想の中心課題となっていく。平安時代から鎌倉時代にかけての、仏教の英傑たちの仕事の研究で、最澄、空海、法然、親鸞、道元、日蓮、これらの人物たちの研究に没頭されていく。ここは梅原思想の中核をなしていますが、もう時間がなくなってきました。ここを語ると、1時間あっても2時間あっても足りない。大きな問題です。これから我々後進の者がやるべき主題。ここはもう全部省略します。

3000メートル上空から見た日本の三層構造

私は京都に来てから、もう35年が経ちます。その頃ちょうど東京の電通が面白い企画を立てて研究会をやった。日本列島を3000メートル上空から空撮するとどういう光景が見えるか？そういうことを、いろんな分野の人間で見て検討しよう。そういう研究会でした。

電通もいいこともやってるんだ。驚きましたね。セスナ機をチャーターしまして、沖縄から3000メートル上空を北上させた。そして、眼下に映し出される日本列島の景観を明らかにし、見せてくれた。最初は沖縄列島から始まりますから、眼下に見えるのは、広い海の青一色であり、列島に近づいてから眼下に見えるのは森だけです。森林一面だけでした。もっともね、ところどころに鍵穴のようなものがポツンポツンとあって、ゴルフ場でした。あのゴルフ場の点景は醜かった。3000メートル上空から見た日本列島っていうのは、ものすごく私には意外だった。

日本は海洋国家だというならわかる。森林国家というなら、なお一層よくわかる。どこに稲作農耕社会なんていうものがあるのかと思うくらいでした。ところが、セスナ機が機首を下げていくと、広大な農耕社会が現れてきた。農業革命以降の日本列島の姿が見えてきて、「おう」と思いました。海洋国家、森林国家を縄文文化の象徴として見れば、2000メートル、1000メー

ルにかけて、まさに農耕社会、弥生文化が現れてくる。さらに機首を下げて、500メートル、300メートルまで降下してまいりますと、こんどは近代都市が、コンビナートが見えてくる。工場群が見えてくる。おう、日本列島は三層構造で出来上がっている、と思いました。三層構造の社会に生まれた三層の意識、価値観、世界観、そういうものが存在するだろう。これが一発で見えた。高さのトリックっていうのかな、こんな国は日本以外どこにあるだろうか。私はそんなに世界を回っているわけじゃありませんけど、ついそう思いました。

世界の500年以上の歴史のある古代都市の空港に降りたとき、そんな光景にぶつかることはほとんどありません。イスラエルのテルアビブ空港、アメリカのシカゴ空港、フランスのドゴール空港、レニングラード、モスクワ、北京、西安、ほとんどありません。

こういう三層構造を見せてくれる古代都市。私は日本列島におけるこの三層構造は、どういう意味を持っているのか。これは重要な研究課題ではないのか。その三層構造というのは、古き時代の層を克服し、否定し、排除して新しい層の時代に進化発展していくという意識構造にはなっていないということは直ちにわかります。

この三層構造が重層化している。その最底辺に広く深く広がっているのが、いわば縄文文化である。こういう認識が自然に私の心に浮かんでくるようになりました。そして、その構想を早くから追求されていたのが、梅原さんです。

もう時間がありません。本当はここから本論が始まる。それは、この後のお二人の論者に論じていただきたいと思っております。梅原猛さんが、「俺は西田幾多郎になるんだ」。これを出発した後、語り続けて、最後に縄文人になろうと、縄文人と文化のために一身を捧げよう。そのことによって世界の現状に、根本的な批判を加える。デカルト批判、ハイデガー批判、これが梅原さんのもう一つの重要な課題になっていった。

私の話はこれで終わります。皆様、どうもありがとうございました。（拍手）

司会

ありがとうございました。

続きまして、川勝平太先生のスピーチです。川勝先生、どうぞ演台へお進みください。

ご存じの通り、川勝先生は昨年まで静岡県知事を15年ほど務められました。そもそも梅原猛所長から国際日本文化研究センターに誘われ、山折所長のもとで教授そして副所長も務められました。演題は「梅原哲学の射程」です。よろしくお願いたします。（拍手）

■スピーチ：「梅原哲学の射程」川勝平太

梅原猛先生は哲学者として出発し、哲学者として生を終えられました。処女作「闇のパトス」から遺作「人類の闇と光」にいたるまで、貫かれているのは哲学する精神です。学問の世界に「日本哲学」という新しい分野を拓いた哲学者でした。

“梅原日本学”と“日本哲学”

梅原さんの学問は“梅原日本学”の呼称で通っています。その学風は、万華鏡のように華麗で、繚乱と咲き匂う大輪の花々の観があります。色とりどりの花のうちどの花をとりあげて鑑賞するかで表情も千変万化します。

梅原日本学のほかに、“梅原古代学”、“梅原万葉学”、“梅原仏教学”の呼称があります。晩年の名著『人類哲学序説』（岩波新書）は文字通り“梅原哲学”です。これらの呼称に入らない中世小説集、スーパー歌舞伎『ヤマトタケル』、創作能『世阿弥』、狂言『ムツゴロウ』『ナマシマ』などの文芸、近世の『円空』についての大著、アイヌを論じた独創的考察もあります。それらのすべての仕事を総称して“梅原日本学”と呼ぶのがふさわしいと思います。

方法と対象に則して言えば、方法は哲学であり、対象は人類とその歴史をにらんだ日本の文化・文明です。少し踏み込んで言えば、プラトン、アリストテレスの哲学を“ギリシア哲学”と呼び、カント、ヘーゲルの哲学を“ドイツ哲学”と呼ぶように、梅原さんの哲学は“日本哲学”と呼ぶのがふさわしいと思います。ギリシア哲学を創始したのはプラトンでしたが、盟友の哲学者・上山春平氏の協力をえながら、日本哲学のパイオニアとなったのが梅原猛さんでした。

“日本哲学”という呼称は私の命名ではありません。日本哲学を樹立するのだという志を梅原さん自身が不惑の頃には立てられていました。

梅原さんは、42歳の1967年5月、神戸大学での関西哲学会で「日本哲学について」と題して報告しています。そこで、日本哲学をさまたげている4つの偏見を指摘。一つは東洋哲学を軽視する西洋哲学の偏見、二つめは仏教と儒教を排する国学の偏見、三つめは中国の哲学史が儒教中心で仏教を扱おうとしない偏見、四つめは自宗派にこだわる仏教宗派の偏見です。これらの偏見を克服し、日本哲学に必要な三つの原理として、〈1〉生命哲学（神道→密教→日蓮）、〈2〉心の思想（唯識→禅）、〈3〉地獄の思想（天台→浄土）を挙げています。40代初期に日本哲学を樹立するという決意を表明し、以来、幽冥境を異にするまで、梅原さんは「日本哲学」の構築に孜孜として努め、それが世界性をそなえた人類哲学になりうるという確信をもって生涯を閉じられました。

日本哲学の中に、たとえば戯曲『ギルガメシュ』や自作能『世阿弥』などの文芸作品が入っているのを疑問に思う人がいるかもしれません。

私の専門は比較経済史ですが、元々、哲学志望でした。私の学問の原郷には三木哲学があります。哲学者三木清はこう述べていました―「文学の研究者が哲学の研究に、哲学の研究者が文学の研究に、……我が国においても文学と哲学との間に、一層内面的な、生命的な、相互の連関、交渉が打建てられるようになることは、私のかねてよりの希望である」と。

三木のパトス論にそこはかたなく影響されていたと思われる梅原さんですが、こう述べています―「多くの日本文学が、仏教と深い関係をもっているのに、国学者は仏教の影響をぬきに日本文学を理解し、明治以後の日本文学界は深い思想がない。「純粹文学的」に文学を生産し、思想的な眼のない浅い文学理解である。過去日本百年の伝統文学の理解の根本的な変更を（求める）」と。梅原さんの表現は過激ですが、見解は三木清と同じです。

戯曲『ギルガメシュ』

梅原さん63歳の作品・戯曲『ギルガメシュ』は、文学と哲学とが混然一体となった作品です。自作の戯曲『ギルガメシュ』について、梅原さんはこう語っていますー「この作品には、現代の人類にとってもっとも大切だと思われる思想が含まれている。あまりにも哲学的、あまりにも思想的なこの作品を、私が書いた文芸作品のなかでいちばんすぐれていると思っている。しかし、日本では上演されず、本の売れ行きも私の著書としてもっとも悪い。『ギルガメシュ』には環境破壊の問題ともう一つ、死の自覚の問題がある。死の問題は私が学生時代、ハイデガーの『存在と時間』を読んで以来の中心問題である。この死の自覚こそ、哲学の中心問題だと考えている。『ギルガメシュ』は私のもっとも愛する作品であるが、この作品が正当に評価されるのは五十年後、あるいは百年後を待たなければならないかもしれない」と。

三木清の希望であったものを梅原さんは戯曲『ギルガメシュ』で実現しました。ただ、日本で上演されていないのは惜しいことです。人類最古の「叙事詩ギルガメシュ」を、梅原さんは人類の未来のために戯曲に仕立て直しました。梅原版『ギルガメシュ』を上演することは梅原さんの供養になると思います。

哲学と文学との関係で、もう一つ、付け加えますと、梅原さんが京大で机を並べたライバル、「正統と異端」の関係などと評されたプラトン哲学の権威・藤澤令夫氏（1925～2004）が名著『アイデアと世界』所収の「文学と哲学」という副題のある論文「プラトンの対話形式の意味とその必然性」で、「プラトンの著作は、端的に言って、文学の書なのか、哲学の書なのか」をテーマとして、遠くホメロスの叙事詩からサップウなどの抒情詩、アイスキュロスなどの悲劇をへて、ロゴスが主役になる過程で、哲人ソクラテスが登場してきたのであり、ソクラテスのロゴスを柱に据えたプラトンの対話篇が「何びとも、これがすぐれた文学作品であることを疑わないであろう」と結論しています。哲学は文学を母として誕生したのです。

「今西自然学」——相似と相違

自然科学の分野で、同じように、洋学と向き合い、洋学を否定的に媒介し、独自の体系を打ち立てた日本発の学問があります。今西錦司さんの学問、ご本人が自分で命名した「自然学」、いわゆる「今西自然学」です。

今西進化論はダーウィンの適者生存と自然淘汰の進化論に対し、適者生存には「棲み分け」を、自然淘汰には「棲み分けの密度化」を突きつけました。今西さんは著書『主体性の進化論』で生物個体はすべからず主体性をもつとし、晩年の著書『自然学の提唱』『自然学の展開』では、生物主体は先験的能力「プロトアイデンティティ」をもっていると論じました。

今西さんの世界観は名著『生物の世界』に記されています。世界は、元は一つであったものが分化して出来たてきたものであるから、すべての存在が類縁関係にあり、どこか相似しており、分化したがゆえに相異なるところがある、というものです。生物個体はどれも主体性をもって「相似と相異」を認知する能力＝プロトアイデンティティを先験的に備えている、というのが今西さんの生物哲学です。

今西さんの「相似と相異」は、先験性の形式として、カントの「時間と空間」に対応します。ただしカントの「時間と空間」は人間の先験的能力を念頭においた人間中心主義です。それに対して今西さんの「相似と相異」はすべての生物個体の先験的能力を念頭においた汎生物主義で

す。このことはプラトン以来の西洋哲学が人間の精神世界だけを相手にした人間中心主義であるのに対して、梅原さんの哲学が森羅万象を相手にした「草木国土悉皆成仏」の天台本覚論であることと相似形です。今西さんの言うどの生物個体にも備わる“プロトアイデンティティ”と梅原さんの言う生きとし生ける衆生すべてに備わる“仏性”（悉有仏性）とは共振しています。

では、生物のプロトアイデンティティを今西さんは証明したのでしょうか。証明済みです。それは“個体識別”という擬人主義的な観察方法です。

今西さんの愛弟子伊谷純一郎（1926～2001）さんがそれを実践しました。名著『高崎山のサル』は個体識別、長期観察、餌付の方法でなしとげられた第一級の成果です。三つの方法の大黒柱は個体識別です。本日同席の山極寿一さんも個体識別でゴリラを相手に画期的な研究成果をあげました。生物同士が”プロトアイデンティティ”で互いに認知し合っている能力は観察者の人間にも備わっていますから、サルがサル同士でやっている個体識別を、人間もサルに対してできるのです。個体識別は今西さんの生物哲学が基礎づけられており、日本の誇る霊長類学が編み出し、今や世界中の霊長類学者が用いている方法です。

日文研の“羅漢グループ”

今西さんも梅原さんも学者としては“異端”で、学問の世界では独りで立っているとも見られがちで、“孤高”の風があります。しかし、決して孤立していません。

今西さんの傘下には伊谷さんのほか梅棹忠夫氏（1920～2010）など“今西グループ”と呼ばれる一流の学者群があり、山極さんはその第三世代にあたります。今西グループに対応するのは、梅原さんが「日文研」に集められたどなたも一家言のある学者群です。そのひとりが本日の基調講演の山折哲雄さんですが、本日ここに出席されている日文研の現所長の井上章一さんなど、日文研の一流の学者群を、梅原さんは“羅漢”と呼びました。“今西グループ”に対して、梅原さんゆかりの学者は“羅漢グループ”です。

今西さんと梅原さんの直接の交流は仄聞しませんが、今西自然学と梅原日本学の共通点は、生きとし生けるもの、生命あるものを対象としていることです。今西さんの言葉でいえば「太陽がさんさんと降り注ぐ地球を相手にする」ことであり、地球的自然です。今西自然学は“自然哲学”、梅原日本学は“日本哲学”を備えています。哲学として共通性があるのは、その淵源に西田哲学があるからです。お二人の独創的な学問を日本の学問の歴史にどう位置付けるかは興味深いテーマです。

哲学者上山春平との出会い

さて、梅原さんの“日本哲学”の成果は膨大です。第一期著作集20巻と第二期著作集20巻がありますが、第二期著作集の刊行後も多数の述作を残されました。

『第一期著作集』の公刊は日文研の創設前（集英社、1981～83）、梅原さん58歳までの作品集で、その第一巻『闇のパトス』は梅原さんの学問の原型、学風の生い立ちの秘密を蔵しています。ニーチェとハイデッガーに傾倒した青年期の“不安と絶望”を総括した「闇のパトス」、ヘラクレイトスについての「生と死の転換—ヘラクレイトスの断片をめぐって」、
「笑いの構造」

などが所収されており、読み応えはありますが、梅原さんはパトスの闇の中で行き詰まりました。「六年のあいだ、論文が一つもかけない状態だった」と後に振り返っています。

梅原さんの20代後半の六年間は、『三教指帰』を24歳で書いてから30歳で唐にわたるまで何をしていたのかが不明の空海（774～835）と似ています。梅原さん空海も20代後半は己れの進むべき道を模索して苦悶・苦闘しました。

その空海の世界に梅原さんが出会ったのは、本人が正直に言われているように、梅原さんの4歳年上の哲学者上山春平さん（1921～2012）のおかげです。“虚空蔵求聞持法”を体得した上山さんの教示で、梅原さんは空海の真言密教に開眼し、不安・絶望の哲学から、笑いの哲学を媒介にして、仏像の微笑に接し、“生命の哲学”へと脱皮しました。

空海24歳の『三教指帰』に密教の気配は微塵もありません。唐の長安で恵果と出会って阿闍梨となり、帰国後に著した『御請来目録』には密教僧空海の面目が脈打っています。梅原さんの20代作品『闇のパトス』に仏教の気配は微塵もありません。西洋哲学と格闘した第一巻と、仏教世界にのめり込んだ第二巻以後の作品の風合いは隔絶しています。蛹が蝶になるように哲学者梅原猛の風貌は一新しました。

上山春平さんは学生時代に精神の危機に陥り、“虚空蔵求聞持法”を実践して乗り越えました。空海24歳の『三教指帰』の序文に、「ここに一人の沙門あり、われに『虚空蔵求聞持の法』をしめす」とあります。上山さんは、「数珠を繰りながら、未明の山道を、如意ヶ岳の山頂をめざして、くる日もくる日も通いつづけ」、虚空蔵求聞持法を実践し、精神的危機を克服しました。

空海にとっての一人の沙門は、梅原さんにとっては上山春平さんであったと思います。二人の若き哲学者の出会いは“啐啄同時”と形容できます。

上山春平に導かれて『古事記』研究へ

仏像・仏典に開眼した梅原さんは、闇のパトスが出口を見つけ、『仏像一形とこころ』、『美と宗教の発見』、『地獄の思想』など一気に爆発。また、上山さんと共同企画で仏教学者の協力を得て毎日出版文化賞に輝いた『仏教の思想』全12巻（昭和43～45年）をまとめあげました。『仏教の思想』全12巻の刊行中に梅原さんは44歳で立命館を退職。そして、主たる研究資料を仏典から日本の『古事記』『日本書紀』『万葉集』『風土記』など日本の古典籍に移し、『神々の流竄』（45歳）に始まる『隠された十字架』（47歳）、『水底の歌』（48歳）のいわゆる「梅原古代学三部作」を発表します。40代後半のこれら梅原さんの画期的な業績は日本の古典籍への没入から生まれました。

なぜ、日本の古典籍にのめりこんだのか。そこにも上山春平さんの存在があります。

学徒出陣した上山さんは、他の多くの学徒兵がたずさえた斎藤茂吉『万葉秀歌』ではなく、自分が、そのために死ぬ“日本”という国の出生の秘密を神話として記述した『古事記』をたずさえて兵役につき、『古事記』を眼光紙背に徹するまで読み込み、やがて「回天」特攻隊員となって出撃命令の下ったその日に無条件降伏となり、危機一髪、無事に生還しました。

『古事記』は三巻からなりますが、上山さんは、“上つ巻”すなわち神代の巻を読み込むうち、神話が「整然とした体系的なプランをもつことに気づき、『古事記』が「たんなる昔話なのではなくて、神話の姿をかりた一種の哲学」、「国家の理念を、神話めいたボキャブラリーを

用いて描いた国家哲学」であるという重大な発見をします。

『古事記』の冒頭に「天地のはじめて発れし時に高天原に成りし神の名は天之御中主神」とあります。このアメノミナカヌシからイワレヒコ（神武天皇）が誕生するまで、多数の神々が生まれますが、そこに貫かれている神々の系譜を整理し「神統譜」と名付けました。「神統譜」の名はギリシアの古典ヘシオドスの『神統記』を念頭においています。ヘシオドスの『神統記』には一『古事記』と同様一実にたくさんの神々が登場しますが、そこに貫かれているのは〈ウラノス→クロノス→ゼウス→オリンポスの神々〉の継承の系譜です。

上山さんは日本の神々は〈カミムスビ→イザナミ→スサノヲ→オホクニヌシ〉の（根の国系）と、〈タカミムスビ→イザナギ→アマテラス→ニニギ〉の（高天原系）の二つの神統系の継承譜からなると見事に整理し、『神々の体系—深層文化の試掘』（1972）、『続・神々の体系』（1975）で発表しました。では、神統譜の創作主体、言い換えると『古事記』の神話の制作主体はだれなのか。それが藤原不比等であることをあぶり出し、記紀の編纂は「天皇家のためというよりはむしろ藤原家のためとみるべき」という注目すべき見解を出しました。藤原不比等を正面から論じたのは『埋もれた巨像—国家論の試み』（1977）です。留意すべきは、副題が「国家論」となっていることであり、もう一つ、この著作が岩波書店の“哲学叢書”第一巻だということです。歴史書に見えますが、哲学書です。

日本を対象とした二人の国家論

梅原さんの『神々の流竄』の第一部は1970年の文芸季刊誌『すばる』創刊号に発表されました。上山さんの『神々の体系』の第一章「古事記の神統譜」が雑誌『歴史と人物』に発表されたのも1970年、同じ年です。二人の哲学者は同時に日本国家の哲学的解明に乗り出しました。

梅原さんは『神々の流竄』の本文中でこう書いています—

「私はいつものように上山春平氏に電話して、私の疑問を話した。私は氏と交際して十余年、私の発表してきたほとんどの仕事は、氏のはげましを得て出来上がった仕事である。私はほとんど毎日のように彼に電話して、私の古代史にかんする考え方を語った。私の疑問にたいして、彼はいった—“出雲族は出雲にいなかったのではないか。出雲族の中心地は、出雲よりも、むしろ大和ではないか”と。この示唆は、私を再び新しい仮説にかりたてた」（第8巻、55頁）と述べています。

上山さんの哲学三部作（『神々の体系』、『続・神々の体系』、『埋もれた巨像』）の公刊と同時期に梅原さんの古代三部作が公刊。『神々の流竄』（1970）は出雲神話、『隠された十字架』（1972）は聖徳太子・法隆寺、『水底の歌』（1973）は柿本人麻呂をテーマとした歴史の書と受け止められ、また“怨霊史観”ともいわれます。それはそれとして、哲学の観点から言えば国家論です。二人の哲学者の仕事は共鳴し、記紀神話を、それが成立した時期の政治権力との関係で解きあかした国家論です。

国家論は哲学の重要な領域です。哲学者プラトンの『国家』、哲学者アリストテレスの『政治学』、哲学者ヘーゲルの『法哲学』、いずれも国家論です。プラトンの『国家』が正義と善による哲人による統治を理想とし、ヘーゲル『法哲学』は法と道徳と人倫をあつかっています。アリ

ストテレスの『政治学』は理論的であるとともに「アテナイ人の国制」などの具体的研究を踏まえています。上山さんは「国家論は着実な個別研究を踏まえた上での一般論であってはじめて実り多いものになりうる」と確信し、梅原さんと二人三脚で日本国家の成立の深層を具体的・哲学的に解明しました。

二人は哲学者として相似ています。個性は相異なります。上山氏は分析的、理知的、いわばアポロンのです。梅原さんは情熱的、文学的、いわばバッカス（ディオニソス）的。アポロンの知性とバッカス的情熱で、プラトン・アリストテレス以来の哲学の中心テーマ「国家論」に、上山さんの哲学的三部作と梅原さんの文学的三部作とが挑み、日本を舞台に据えた国家論として画期的な業績になりました。

「日本学事始」と国際日本文化研究センター創設

第一期『著作集』の掉尾を飾る第20巻のタイトルは「日本学事始」。このタイトルは同著作集に収録された唯一の対談—上山春平氏との対談—のタイトルと同じ。第一期『著作集』の締めくくりが「日本学事始」です。

ちなみに第二期『著作集』の最終巻は『小説集』です。その小説集の掉尾におかれたのは戯曲『ギルガメシュ』です。二つの『著作集』の最終巻はともに総括的位置にあります。総括は次の旅立ちの方向をさし示すものです。第一期の総括「日本学事始」は日文研の創設に向かう旅立ちとなり、第二期の総括『ギルガメシュ』は、梅原さんの哲学する対象が、一つには能・狂言に代表される文学となり、もう一つは文明の哲学への旅立ちとなって、文明の哲学はやがて人類哲学に結実します。

第一期最終巻所収の上山さんとの対談で梅原さんはこう語っています—「日本についての学問・日本学は、いままで、ほんとうの意味では存在しなかった。……日本の哲学を研究する機関が、アカデミズムにはない」と。

上山氏は「日本学は、（海外から渡来した思想が）相互によじれあった思想の絡まりあいとしてつかまえる世界学にならざるをえない」と応じています。

“日本学は同時に世界学になる”という認識はきわめて示唆的です。日本にある知的資産が世界性をもっていることが、その発言の背景にあります。日本の知的資産が世界性をもつがゆえに日本学は世界学にならざるをえない。そのような「日本学」の樹立こそが日本哲学の課題だ、そう宣言した第一期『著作集』が1983年に完結するや、二人はすぐに行動に出ました。

翌1984年の秋、野村別邸で、上山・梅原両氏は、貝塚茂樹、今西錦司、桑原武夫、梅棹忠夫などと中曽根総理を囲み、桑原氏が代表して、「国際的な日本“文化”研究所創設」の提案がなされました。首相は即座に応じて調査費がつけました。日文研は無事創設され、その日本語名称は“国際日本文化研究センター”と「文化」が入っています。桑原さんが「日本文化の研究所を」と総理に要請されたからでしょう。日文研の英語名称はInternational Research Center for Japanese Studiesであり、文化cultureは入っていません。英語の名称のほうが“日本学”の総合性を表しています。

『日本文明史』全7巻、『講座 文明と環境』全15巻刊行

ところが、梅原・上山、二人の哲学者は、日文研創設が決まったときすでもう一つの軸足を立てていました。文明の哲学です。これも上山氏が先鞭をつけます。上山春平監修『日本文明史』全7巻（1990～92）です。「受容と創造の奇跡」と題された第一巻を上山さんが一人で執筆（一人一巻の担当、山折哲雄氏（日文研、当時）が第四巻を担当）。

梅原さんが「文明」の哲学に旅立つ思想的転機は『叙事詩ギルガメシュ』との出会いでした。シュメール王ギルガメシュが野人エンキドゥと“森の神フンババ”を殺害する『ギルガメシュ叙事詩』と出会って、梅原さんは“西洋は森を破壊する文明”、“文明は森のあるところで発達し、森を食いつぶして滅亡する”という認識を深めました。それを現代に生かすべく、1988年に戯曲『ギルガメシュ』に仕立て直して公刊したのは日文研発足1987年の翌年。

梅原さんの意向を受けて日文研では1991～93年に文部省重点領域研究「地球環境の変動と文明の盛衰」の大プロジェクトを実施。その成果は『講座 文明と環境』全15巻に結実。日文研の学者を含む総勢250人をこす学者が結集。『文明と環境』全15巻の示しているのは、日文研は、正式名称は「国際日本文化研究センター」ですが、実質は「国際日本文明研究センター」でもあるということでした。

総編集者は梅原猛・伊東俊太郎・安田喜憲の三名。『講座・文明と環境』全15巻（朝倉書店、1995～96年）の構成—1『地球と文明の周期』小泉格・安田（21論文）、2『地球と文明の画期』伊東俊太郎・安田（16本）、3『農耕と文明』梅原猛・安田（16本）。4『都市と文明』金関恕・川西宏（21本）。5『文明の危機』林俊雄・安田（20本）。6『歴史と気候』吉野正敏・安田（21本）。7『人口・疫病・災害』速水融・町田洋（19本）。8『動物と文明』河合雅雄・埴原和郎（19本）。9『森と文明』菅原聡・安田（20本）。10『海と文明』田中耕二・小泉格（17本）。11『環境危機と現代文明』石弘之・沼田眞（15本）。12『文化遺産の保存と環境』石澤良昭（21本）。13『宗教と文明』山折・中西進（14本）。14『環境倫理と環境教育』伊東俊太郎（14本）。15『新たな文明の創造』梅原猛1996年（15本）。計269本の論文

長江文明の発見

梅原さんを文明の哲学に向かわせたもう一つの契機は、中国浙江省の河姆渡遺跡・良渚遺跡のフィールドワーク（1993年）で得た「長江文明」の直感です。梅原さんは行動に出ました。中国側と長江文明の共同調査のための協定に奔走。1998（平成）10年—国際日本文化研究センターは湖南省文物考古学研究所との間に正式協定。日本側は安田喜憲氏（当時、日文研助教授）を中心として世界最古の年と思われる約六千年前の城山山遺跡の共同学術調査に入ります。

これが一連の安田さんの長江文明の発見と実証に結実しました。安田さんを梅原さんが日文研に招いたのも“啐啄同時”のもうひとつのモデルです。

「長江文明」の発見は世紀の大発見でした。これは先の講座の第三巻『農耕と文明』を編集した梅原さんが、「農耕と文明」と題した総論を執筆。そこで梅原さんは、良渚遺跡のフィールドワークを根拠とした長江文明の仮説を明快に提示しています。梅原仮説はほぼすべて安田さん

によって実証されました。梅原さんが長江文明の発見を導いたのです。

「草木国土悉皆成仏」

長江文明から派生した弥生文化は縄文文化と出会います。弥生と縄文とは稲作・漁撈文化として森と共存。長江文明は巨大な水量をほこる長大な長江に支えられているので、長江流域の稲作民は平気で周囲の森を破壊して水田を拡大しました。しかし弥生文化は日本の森を破壊できなかった。日本の河川は短く、平野は狭く、河川の水源は森だったからです。弥生の基層に縄文があります。縄文人の基層にあった心（アニミズム）を、高等宗教の仏教を媒介にして、梅原さんが行き着いたのが「草木国土悉皆成仏」の天台本覚思想です。草木まで成仏するという天台本覚は他国の仏教にはない日本仏教の一大特徴です。

縄文文化は無文字文化です。霊長類学者が言葉のないサルになりかわってサルの文化を語るように、梅原さんは、文字のない縄文人になりかわって、縄文人の心を天台本覚論によって語りました。「草木国土悉皆成仏」は一言でいえば「森」の哲学テーゼです。

人間中心主義に対する徹底的な批判

梅原さんが亡くなって数か月後、遺作「人類の闇と光」が『芸術新潮』2019年4月号に掲載されました。「人類は戦争をする動物である」「人間は、戦争すなわち他の動物がけっしてしない同類の大量殺害をする動物である」という厳しいテーゼが出されています。

確かに、人間は敵を作り、敵を戦争で人を大量に殺す動物です。一方で、和をなし、平和をつくることのできる動物でもあります。梅原さんは「憲法9条の会」（2004年設立）の創設メンバーのひとりです。昨年（2024年）、被団協がノーベル平和賞をとりましたが、「憲法9条」をノーベル平和賞にすることは梅原さんの希望であると思います。

戦争をする動物になるのではなく、平和をつくる人間になる根拠が日本にあるでしょうか。天台本覚思想を生んだ良源（912～985）が“比叡山”の天台座主であったこと、比叡山という場所にヒントがあります。それは何か。

梅原・上山両氏の編『仏教の思想』全12巻のうち日本四巻を梅原さんが担当。選ばれた代表4人は空海を別格として親鸞・道元・日蓮の三人です。この三人に法然を加えた4名が仏教を日本化しました。それが13世紀です。13世紀の画期性をとらえて山折哲雄さんは日本精神史における「軸の時代」と呼んでいます。

「軸の時代」とは哲学者ヤスパースのいう「枢軸時代」を踏まえています。今から2500年ほど前、ユーラシアのギリシアに哲学、中東に一神教、インドに仏教、中国に儒教がほぼ同時に出現し、人類の宗教・思想の原型が出来上がりました。その世界史的画期をヤスパースは「枢軸時代」と名付け、比較文明史家の伊東俊太郎氏（彼も日文研）はそれを人類史上の「精神革命」と呼んでいます。山折さんが提起した13世紀日本の軸の思想、すなわち浄土宗、浄土真宗、禅、日蓮宗は日本人の思想の底流となりました。

軸の思想家はすべて比叡山から出ました。山折さんは比叡山の特徴が“論・湿・寒・貧”であると喝破。“論”は天台の根本経典『法華経』、“湿”は湿潤です。寒・貧は字のとおり。

山折氏が強調するのは“湿”です。なぜ“湿”が重要か。それは、「枢軸時代の精神革命」の風土

が乾燥の地であり、日本の「軸の思想」を生んだ風土だけが湿潤の地だからです。ソクラテス、一神教の預言者、シャカ、孔子が乾燥した風土から生まれました。

梅原さんは、「私はキリストも釈迦も孔子もソクラテスも、克服されるべき思想家ではないか、と思う。大事な点が落ちているからだ。仏教も儒教もキリスト教もソクラテスも人間中心主義な思想であることを免れない」（『講座文明と環境第13巻—宗教と文明』148頁）と厳しく批判し、続けて—

「私は、ヤスパースのように、農耕牧畜社会において人間の精神の指導原理となった四人の聖人の支配の時代は終わって、新しい精神的指導者が出現すべき枢軸時代を迎えていると考える。この新しい枢軸時代の哲学は、四聖人の思想の人間中心主義に対する徹底的な批判なしには可能でないと思う」（『講座・環境と文明第3巻—農耕と文明』19頁）と、述べています。

山折さんと梅原さんとはほぼ同じことを語っています。“徹底的な批判”の橋頭保は“湿の比叡山”に象徴される日本の「場」のもつ力です。

日本は、伊東俊太郎氏のいう「人類史における人類革命→農耕革命→都市革命→精神革命→科学革命の五段階」のどの革命にもまったく関与していません。上山編『日本文明史』全七巻の上山担当の第一巻のタイトルが『受容と創造の軌跡』となっているのは、それを踏まえています。日本は諸革命の精華を舶来文明として“受容”して独自の文化・文明を“創造”してきました。

日本にホモ・サピエンスが到達したのは三万年ほど前。彼らが縄文文化の担い手。農耕革命は弥生文化、都市革命は平城京・平安京の建設、精神革命は大乗仏教として日本に影響しました。

ユーラシアから舶来した思想群が日本化（国風化）するのは平安時代です。先の『日本文明史』の第4巻で山折さんは平安時代の公家的文化をあぶり出しました。それは「パクス・ヘイアンナ」（平安京都の平和）と呼びうる内容です。公家的文化は、鎌倉期に武家文化に圧倒されますが、江戸時代には公家的文化が庶民レベルにまで広まり、野口武彦さんが執筆した第六巻のタイトルは『太平の構図』、つまり天下泰平の「パクス・トクガワーナ」（徳川の平和）となります。山折さんは、それを受けて、「パクス・ヤポニカと軸の時代の思想」の副題をもつ『ニッポンの負けじ魂』で「パクス・ヤポニカ（日本の平和）」を論じました。

それらを踏まえると、日本文明における平和の生成の三段階を読みこむことができます。第一段のホップが平安時代の「パクス・ヘイアンナ」、第二段のステップが江戸時代の「パクス・トクガワーナ」、そして、いまや世界に向けて発信する第三段の「パクス・ヤポニカ」へとジャンプすることが、日本の使命ではないかということです。

それはまた、国際日本文化研究センターを“国際日本文化・文明研究所”へと脱皮させることでもあります。

日本は「知の正倉院」

舶来学問の第一波「仏教」は、平安期に比叡山の森のなかで天台本覚思想を生み、13世紀の軸の思想家を輩出して日本思想の底流となり、第二波の「朱子学・儒学」は水戸学・国学・武士道などを派生させる過程で日本人の教養となり、第三波の「洋学」は、洋学の華「ノーベル賞」の受賞者数において、国別で日本人受章者数が今世紀になってイギリス、ドイツ、フランス

などヨーロッパのどの国をも引き離し、アメリカに次ぐ二位の位置を占めています。日本の洋学のレベルは本場の西洋を凌駕するまでになりました。

それが何を意味するか。ヤスパースや伊東俊太郎さんのいう「枢軸時代の精神革命」で生まれた人類の知的遺産、東洋の仏教、儒教、西洋のヘブライズムとヘレニズム、両者から生まれた自然科学に代表される洋学が、聖徳太子の時代から今日まで、過去1400年の間に日本列島にしっかりと根付いているということです。

人類の知的資産のほぼすべてが、重畳的に、富永仲基の『出定後語』の言葉を借りれば「加上」されてきました。神・仏が習合し、儒学が加上され神・仏・儒が習合し、近代には洋学が加上され、それらが絡みあい、重なりあっているのが日本の学問の総体です。

今日の日本は、人類の生んだ知的資産のいわば「正倉院」、「知の正倉院」です。

そのような世界性を備えた日本から生まれた今西自然学と梅原日本学が世界性をもつのは必然の帰結です。日本の土壌から生まれた今西自然学と梅原日本学は、南方熊楠流に言えば「東風の学問」です。

“日本＝知の正倉院”から、その宝物を掘り出すのは知を愛する者でなければなりません。それは知を愛するフィロソファーの仕事です。哲学に生涯を投じたフィロソファー梅原猛さんは“日本＝知の正倉院”を愛する「日本哲学」のパイオニアでした。

最後に梅原さんの“詩”を紹介して終わりますー

「密なるものの 語る声は 静か」

「草木国土悉皆成仏 国土は富士なり」

「ものなべて 往きては 還り また巡る 森のことわり 知るや知らずや」

「あかあかと ふじの高嶺は 輝きて 森のことわり 語らんとする」

ご清聴ありがとうございました。

司会

ありがとうございました。それでは10分間の休憩です。

座談会

司会

それでは後半の座談会を始めたいと思います。

壇上のみなさんをご紹介します。まず、総合地球環境学研究所所長の山極壽一先生です。梅原猛先生は晩年、これからは「人類の哲学」が必要なんだと『人類哲学序説』を上梓され、その「本編」の執筆途中でこの世を去りました。梅原記念財団は、この「人類哲学」を標榜する財団として具体事業の検討が進んでいますが、メイン事業「梅原猛人類哲学賞」の選考委員長として取りまとめ役をお願いしているのが山極先生です。そして、いましがた熱いスピーチをいただきました川勝平太先生と梅原代表理事。そしてモデレーターは、この京都大学稲盛財団記念館で研究をなさっている京都大学人と社会の未来研究院特定准教授の小西健吾先生です。

それでは小西先生、どうぞよろしく申し上げます。

小西

みなさま、こんにちは。小西と申します。僭越ながら座談会のモデレーターを務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

早速でございますが、まず梅原代表理事からお話をいただきたいと思います。

■スピーチ：「梅原記念財団の始動」梅原賢一郎

梅原です。どうぞよろしくお願いいたします。

私の持ち時間は15分です。時間が限られていますので、なるべく言葉を少なくして、映像とか文字を活用したいと思います。ですから、文字のところはあえて上から重ねて音読をしないことにしていますので、そこのところは黙読でよろしくお願いいたします。時間節約のためです。そして最初の3分で、ざっと梅原猛の人生を振り返ります。無茶な話ですけれども。そのあと、著作を中心に、梅原猛がなにをしようとしたのか、なにを考えていたのか、そういうことについてお話ししたいと思います。

そして、梅原記念財団の方向性をいくつか導き出したいと思っています。では、さっそく、はじめさせていただきます。

梅原記念財団の始動



哲学者 梅原猛

(はじまり) から (おわり) へ



1925年3月20日、仙台で生まれる。



母の死



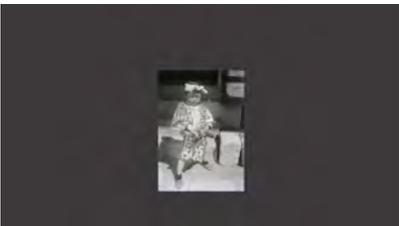
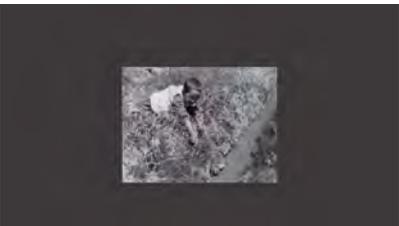
1歳と9ヶ月のとき、愛知県の梅原家の本家、伯父伯母に引き取られる。



伯父は味噌醤油醸造業を営んでいた。
伯母は尾崎紅葉の門弟、小栗風葉の妹。



少年時代





中学生のある日、伯父から出生の真実を聞かされる。



そうであるはずがそうではなかった。



1945年4月 京都大学文学部哲学科に入学



町長をしていたこともあり、東京の法学部をすすめる伯父に、
「政治は十年、だが、哲学は百年、世の役に立つ。」
と、啖呵をきって家を出た。



入学式を終え、故郷に帰ると、「赤紙」が届いていた。



戦争（入隊）



1950年12月 結婚



ひとりぼつねんと思索にふける。



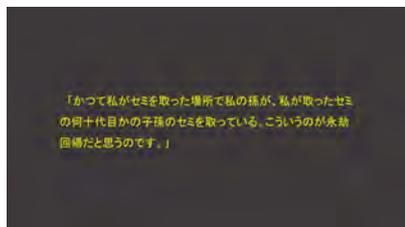
数々のエピソード(失敗談・奇行)
百貨店の屋上に幼児二人を忘れる
風呂の壁面を黒板がわりにする
その他多数



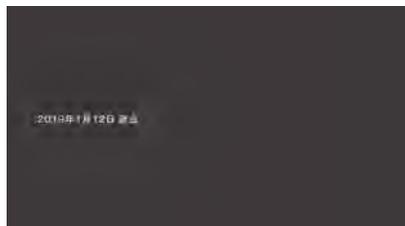
母 ひまり 賢一郎



故郷の山寺で
孫たちとセミ採りをして



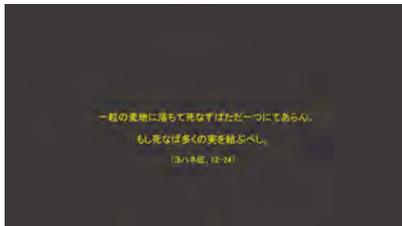
「かつて私がセミを取った場所で私の孫が、私が取ったセミの何十代目かの子孫のセミを取っている。こういうのが永劫回帰だと思っ...」



2019年1月12日 逝去



大往生
享年九十三歳



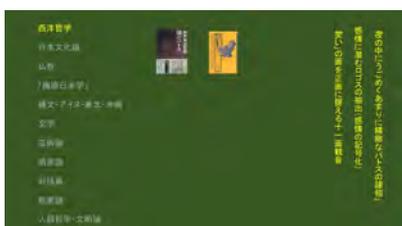
「一粒の麦地に落ちて死なずばただ一つにてあらん。もし死なば多くの実を結ぶべし。」
(ヨハネ伝、12-24)

梅原猛はたくさんの書物を書きました。スライドの左にあげるのが仮にジャンル分けをしたものです。



- 西洋哲学
- 日本文化論
- 仏教
- 「梅原日本学」
- 縄文・アイヌ・東北・沖縄
- 文学
- 芸術論
- 娯楽論
- 対話篇
- 能楽論
- 人類哲学・文明論

だいたい時代順に並んでいます。いちばん最初は西洋哲学、まだ梅原猛が西洋哲学に軸足をおいていたころの作品です。西洋哲学において、なにをしようとしたのか、処女作ととってもいい「闇のパトス」という論文のなかで、こういう言葉があります。「夜の中にうごめくあまりに精緻なパトスの諸相」。



「夜の中にうごめくあまりに精緻なパトスの諸相」
感情に潜むロゴスの抽出（感情の記号化）
「笑い」の面を正面に据える十一面観音



西洋哲学

『闇のパトス』

『笑いの構造』

パトス、情念、感情。梅原猛は西洋哲学において、感情論、感情についての考察をしようとしたことがうかがえます。おそらく、そのとき、梅原猛のなかには、時代的にも、個人的にも、さまざまなパトスが渦巻いていた。不安、悲しみ、苦悩。だいたいそのような負の感情だったと思います。感情というのは曖昧でとりとめもないものだというふうに思われるかもしれないけれども、そうではない。感情のなかにも、ある種のロゴスが潜んでいる。それを抽出しようと、感情の記号化のようなことを試んでいます。西洋哲学においては、理性あるいは理性的認識についての考察とか分析はいろいろとなされた。カントの『純粹理性批判』なんかを念頭におけばいいかと思います。

けれども、それに比して、感情についてはそれほどでもない。私がやるんだという、非常に野心に満ちた論文がならんでいます。しかし、これは、完成することはありませんでした。

そして、さまざまな感情のなかでも、「笑い」というものに注目をしていくようになります。負の感情からみずからを救いたいというようなことがあったのではないかと思います。梅原猛はフィールドワーカーでもありました。そのころ、大阪の寄席や劇場にしきりに通いました。大阪の劇場の楽屋で大村崑さんに無理矢理挨拶させられたことを覚えています。幼稚園のころでした。で、『笑いの構造——感情分析の試み』のなかに、私はちょっとほほ笑ましいというのか、かわいらしい表現を見つけました。

「私がもし十一面観音を作るとすれば、その正面には笑いの面をぜひ据えたい」と、そのように書いています。



日本文化論

『地獄の思想』

『美と宗教の発見』

『仏像』

『塔』

戦争への反省

「日本文化論」にたいする批判的考察

「自然生命的存在論」

そのつぎは、日本文化論です。私は正直に申し上げて、そんなに熱心な梅原猛の読者ではありません。だいたいのことはわかっているつもりで、熟読したり精読したりすることはあえて避けていたというようなところがあります。今回、とくに、『美と宗教の発見』『笑いの構造』を読

み返しました。若い梅原猛の意欲的な息づかいがひしひしと伝わってきましたが、そこに色濃く出ているのは戦争への反省ではないかと思いました。

なぜ、日本は戦争を起こしたのか。それは、歪んだ、偏った、単元的な日本文化論というものがあったからではないかと。だから、日本というものを、もっと、広く、深く、勉強しないといけない。偏った、歪んだ日本文化論、単元的な日本文化論というものが戦争を起こす少なくともひとつの要因になったのではないか。文化論にたいする鋭い批判的考察をしています。

そして、私は、『美と宗教の発見』のなかに、この言葉を見つけて、ああ、なるほどと思ったのですけれども、「自然生命的存在論」という言葉です。もう、すでに、以後の梅原猛の哲学というのがここにあるのだなというふうに思いました。「自然生命的存在論」というのは、いってみれば、アニミズム的な自然崇拜というのが基盤にあって、空海の生命哲学がそれに重なって、そして「草木国土悉皆成仏」というようなところに着地していくということで、日本の文化のなかで、一本筋の通った、大きな幹というものはここだというふうに、梅原猛は述べていると思います。

「わび」「さび」とか、「あはれ」とか、そういうものが脇に追いやられるような感じで、一本の大きな太い幹をここに提示しているように思います。



仏教

『仏教の思想』

『空海の思想について』

『法然の哀しみ』

『親鸞のこころ』

『親鸞「四つの謎」を解く』

『歎異抄』

『梅原猛の歎異抄入門』

『法然・親鸞・一遍』

仏教を哲学的テキストとして読む

哲学的アーカイヴ（資源）としての仏教思想

東洋哲学を母胎とする現代哲学の可能性

それから、仏教のシリーズですね。さきほど、川勝先生もおっしゃいました『仏教の思想』という全12巻です。比較的若いときの仕事です。この企画によって、なにをしようとしたのか。

私なりに理解をしますと、仏教を哲学的テキストとして読むということに尽きると思います。哲学的アーカイヴとしての仏教思想。アーカイヴというのは、要するに、なにかものを考えるときに、そこに立ち戻って、そこからインスピレーションを受けたり、あるいは、探している言葉をそこに見つかったり、また、それを読み替えて、あたらしい哲学にしたり、それを再編集したり、そこにある言葉をあらたな布置のもとに置いて、あたらしい表現に仕立てたり、そういうこ

とができる、たえず、そこに立ち返って、あたらしいものを生み出していく資源、そういうものがアーカイブです。

西洋の哲学でしたら、それは、ギリシャ哲学とか、中世のキリスト教哲学とか、そういうものになるんだと思いますけれども、そうやってそういうところに立ち返りながら、それらを読み替え、再編集し、近代哲学、現代哲学と展開していった。それに比して、東洋においては、そういうことがほとんどなされていない。

それは、仏教思想、あるいは、東洋思想というものが、哲学的なアーカイブとしてじゅうぶん自覚されていないからではないか。仏教書というのは宗教書であって、悟りとか、悟りに近い境地にいたらなければ理解できない難解なものだとか、あるいは、修行をとまなわないう文字だけの学問は、意味がないとか、そういう風潮というのか、固定観念があるのかもしれませんが、もちろん、そういう側面を否定はしませんけれども、しかし、そうだからといって、哲学的テキストととして読むということが無効になるはずはない。哲学的なテキストと読めるところは読まなければならない。そして、哲学的アーカイブとしてしっかりと打ち立てる。そのうえで、そこから新しい哲学、新しい表現を生み出していく。

そして、さらには、そのような、東洋の哲学的アーカイブを母胎とする、現代哲学だってありだろう。いま、現代哲学といわれているものは、ほとんどというのか、すべて、西洋のアーカイブをもとにしている。仏教や東洋思想に言及する人も、よくよく見れば、アーカイブとしては、西洋のそれを母胎としている。

梅原猛はそうじゃなくて、つきつめていけば、もっとラディカルに、アーカイブとしての仏教思想、東洋思想というものをもとにして、そこから、あたらしい現代哲学の可能性というものを考えていたのではないかと思います。



「梅原日本学」

『隠された十字架』

『水底の歌』

『歌の復籍』

『さまよえる歌集』

『聖徳太子』

『海人と天皇』

『黄泉の王: 私見・高松塚』

『古事記』

『神々の流竄』

『葬られた王朝』

『天皇家の `ふるさと、日向をゆく』

梅原猛の政治哲学

梅原猛の国家論

敗者・葬られし者への眼差し

怨霊・鎮魂

政治哲学や国家観なき政治への警鐘

それから、「梅原日本学」と呼ばれるものです。

これは、さきほど、川勝先生もおっしゃいましたけれども、梅原猛の政治哲学、あるいは、梅原猛の国家論であって、国の成り立ちについて論じ、考察したものです。日本の国は、こういうふうにして成立したと。

また、日本の国の成り立ちには、固有な政治的な作法があると。敗者や葬られし者へのまなざし、また、そこに、怨霊とか鎮魂とかいうキータームが出てきます。

そして、表のテーマは、日本の国はどのようにして作られたかということですがけれども、裏のテーマは、政治哲学や国家観なき政治への警鐘、現代の政治家への警鐘、そういうようなことでもあります。



縄文・アイヌ・東北・沖縄

『蘇る縄文の思想』

『縄文の神秘』

『日本の深層』

『アイヌ学の夜明け』

『アイヌは原日本人か』

二つの中心をもつ楕円構造

生きとし生けるものとの交際術（エチカ）

それから、縄文、アイヌ、東北、沖縄、これは、日本文化というものを、広く、深く、理解しなければいけないという一貫的な姿勢のなかで、基底的なもの、基層的なものに突き当たります。それが、縄文であったわけです。そのようにして、縄文の発見、再発見ということで、梅原猛は、縄文と弥生という二つの中心をもつ楕円構造というようなことをいいます。これが日本文化の二つの底流となって、ずっと、流れているのだと。

そして、なによりも、そのような縄文から学ぶべきことは、生きとし生けるものとの交際術、エチカというようなものだと思います。それは、なにか甘ったるい共生とか、そういうようなことではないと思います。生命としての威厳とか、誇りとかをもとにした、命の交換術、交際術、切羽詰まった、緊張をもった、ある意味、厳粛なものだと思います。



文学

- 『中世小説集』
- 『もののかたり』
- 『スーパー歌舞伎ヤマトタケル』
- 『ヤマトタケル』
- 『小栗判官』
- 『オオクニヌシ』
- 『王様と恐竜』
- 『ナマシマ』
- 『ムツゴロウ』
- 『ギルガメシュ』

スーパー〇〇（歌舞伎・能・狂言）

越境的創造

「もの」のかたり

梅原猛は、小説や戯曲も書きました。

まず、「スーパー〇〇」と呼ばれるものです。「スーパー歌舞伎」とか「スーパー能」とか「スーパー狂言」。いってみれば、越境的な創造ですね。梅原猛は越境者です。ジャンルを越えて、敷居を越えて……。でも、本人は、越境したという意識はほぼないと思うのです。マグマのようなもの、パトスというか情熱があるだけで、それを創造につなげているだけで……。

小説も書いています。『もののかたり』とか『中世小説集』です。それらは、だいたい、今昔物語集とか説経節とかの翻案です。それらから題材をもらって、小説にしている。しかし、翻案といっても、近代的なバージョンを作ろうとしたというのとはちがいます。むしろ、「もの」に語らせようとした。「もの」というのは、物体でもあるし、人でもあるし、魂でもあるし、もののけとか怨霊でもあるし、妖怪でもあるし、そういう「もの」の「かたり」として、書いたわけです。今昔物語集とか説経節から題材をとって、「もの」の「かたり」としての物語をあらたに書いた。

たとえば、説経節から題材をとって、『山椒太夫』という小説を書いていますけれど、それは、森鷗外の向こうを張って、「もの」の「かたり」として書いているわけです。

それから、梅原猛には、芸術論もあります。娯楽論もあります。そして、対話篇です。



対話篇

- 『仏教を考える』
- 『神仏のかたち』
- 『小学生に授業』
- 『日本人は思想したか』
- 『哲学への回帰』
- ほか多数

哲学は対話である
哲学は万学の母

ほんとうに、いろんな人と対話をしています。小学生とも対話しているわけです。それから、ここは「京都大学稲盛財団記念館」ですけど、稲盛和夫先生とも対話をしています。

これは、やはり、哲学は対話であると。ソクラテス以来のそういう精神。それから、哲学は万学の母であって、どのような学問も、その根底には哲学的思考があるべきだという信念からそうしてるのだと思います。



能楽論

- 『うつぼ舟Ⅰ 翁と河勝』
- 『うつぼ舟Ⅱ 観阿弥と正成』
- 『世阿弥の神秘』
- 『元雅の悲劇』
- 『翁と観阿弥』
- 『世阿弥』
- 『信光と世阿弥以後』
- 『能を観る』

草木国土悉皆成仏

それから、能楽論をいろいろと書きました。

晩年の人類哲学のキーワード、「草木国土悉皆成仏」という言葉が能のなかに出てきます。そのような関心から、能楽に集中したのだと思います。『鶴（ぬえ）』とか、そういう曲です。



人類哲学・文明論

- 『人類哲学序説』
- 『人類哲学へ』
- 『共生と循環の哲学』
- 『脳死は本当に人の死か』
- 『長江文明の曙』
- 『長江文明の探究』
- 『太陽の哲学を求めて』

脱人間中心主義

- 「図」の哲学ではなく「地」の哲学
- 「発展」「進歩」「成長」ではなく「循環」「回帰」「往還」
- 「社会主義も資本主義もまもなく崩壊する」

それから、人類哲学、文明論。

人類哲学の骨子は脱人間中心主義。

それから、「図」の哲学ではなく「地」の哲学。人間が頭のなかで考えた「設計図」に基づいて、自然を開発するとか、改変するとか、そういうのではなく、「地」、つまり、人間がそこに立つ大地とか、人間がそれに包まれてある自然とかピュシスとか、そういう「地」に、むしろ、重きをおいて、そこから哲学を組み立てるといようなことです。

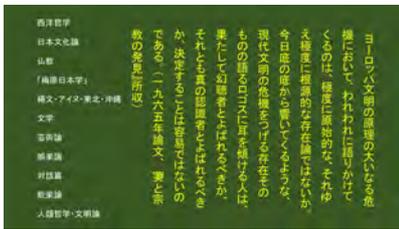
それから、発展・進歩・成長ではなく、循環・回帰・往還。発展とか進歩とか成長とかの神話からいいかげん目を覚まさなければならぬ。循環とか回帰とか往還に身をまかせる。自然法爾。そういうことだと思います。

それから、梅原猛は、早い段階で、すなわち、ソ連が崩壊する以前から、社会主義も資本主義もまもなく崩壊するというふうにいっていました。私は、間近に聞いて、なんやこの人はというふうに思いましたけれども、これを、人は、「大風呂敷」とか「法螺吹き」とかいうのでしょうか。

財団の方向性

最後に、財団としての方向です。

『美と宗教の発見』に収められた論文（1965）のなかで、こんなことをいっています。ある意味、すべてはここにあるといっても過言ではないと思います。



「ヨーロッパ文明の原理の大いなる危機において、われわれに語りかけてくるのは、極度に原始的な、それゆえ極度に根源的な存在論ではないか。今日底の底から響いてくるような、現代文明の危機をつげる存在そのものの語るロゴスに耳を傾ける人は、果たして幻聴者とよばれるべきか、それとも真の認識者とよばれるべきか、決定することは容易ではないのである。」（1965年論文『美と宗教の発見』所収）



四つの方向

⇒哲学のOSの変換

近代がもしスピノザ哲学をOSとして採用していたら（國分功一郎）

大乘仏教の理法 レンマの射程（山内得立）

⇒エスノフィロソフィー

世界哲学（納富信留）

⇒対話

生命・動物・植物・地球（日高敏隆・河合雅雄・松井孝典）

⇒芸能と芸術

祭り／伝統芸能／芸術

四つの方向が導き出されると思います。

一つは、哲学のOSの変換。OSというのはオペレーティングシステムです。コンピューター用語からとらせていきました。國分功一郎さんが、「近代がもしスピノザの哲学をOSとして採用していたら」というような表現をしておられますので、そこからとらせていただきました。要するに、なにかものを考えるときの基盤となる論理とか、存在論とか、思考の根底にある知の枠組、そういうものを変革するということですね。そうすることによって、ガラッと世界の風景も変わる。代替可能なOSとして、大乘仏教の「一即一切」「一切即一」という理法、あるいは、レンマ。それらの射程もじゅうぶん考えなければならない。

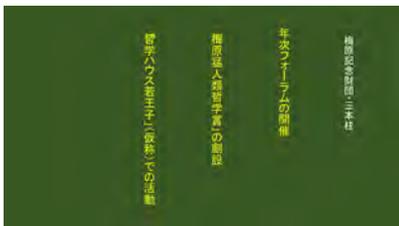
山内得立さんは梅原猛の恩師です。晩年、『ロゴスとレンマ』という本を書かれました。ロゴスというのは西洋的な論理であって、レンマというのは、いってみれば、東洋的な、大乘仏教の理法ですね。論理と理法というふうにはわたしは言葉を言い分けていますけれども、そういう理法。簡単にいいますと、あるのでもない、ないのでもないというような立場を容認する、そういう理法です。善か悪か、正義か敵かみたいな、二分法で切り分けるのではない思考について、よくよく考えなければならない。

それから、エスノフィロソフィー。沖縄とかアイヌとか縄文とか。東京大学の納富信留さんが「世界哲学」ということを提唱されていますが、哲学は西洋だけにあるわけではない。世界のどのようなエスニック・グループにも、死んだらどうなるのか、どう行動すべきかなど、哲学的思考がある。それは学術的なかたちにはなっていないにしても、神話とか歌とか儀式とか、その

ようなかたちで表現されている。そういうのにも注目しなければならないのではないか、ということ。

それから、対話です。晩年まで仲良くさせていただいた、自然科学者をお三人、あげさせていただきますけれども、日高敏隆さん、河合雅雄さん、それから、松井孝典さん。人間を考えるには、動物や植物や地球や生命そのものの立場から考えることも重要ではないか、ということ。そのほかにも、いろいろな学問と対話をしなければならないということです。

それから、芸能と芸術。日本では、祭り／伝統芸能と芸術が分断されていて、それぞれ、たがいに牽制し合っている面があるのではないかと。本来、根は一緒、系統図を描けば、おなじ根から出たはずなのに、ただ、芸術は外来種といえるかもしれませんが、祭り／伝統芸能／芸術と分断され、たがいに牽制し合って、力を削ぎ合っているようなところがある。おたがいがおたがいをよくわかっていない。もうすこし、相互に浸透するというか、融通無碍のような関係を考えることも重要ではないか。梅原猛の「スーパー○○」の狙いも、案外、そういうようなところにあったのではないかと思います。



梅原記念財団・3本柱

年次フォーラムの開催

「梅原猛人類哲学賞の創設」

「哲学ハウス若王子」（仮称）での活動

梅原記念財団の三本柱。「年次フォーラムの開催」。「梅原猛人類哲学賞の創設」、これは、さきほど、和泉さんがおっしゃいました、その委員長を、山極先生にお願いをしておるところでございます。それから、「哲学ハウス若王子（仮称）」での活動。東山三十六峰の麓、若王子で、いろいろな活動をしていきたいと思っています。

ご清聴ありがとうございました。（拍手）

小西

梅原先生、どうもありがとうございました。

続きまして山極先生よりお話をいただきます。どうぞよろしくお願いたします。

■スピーチ：「人類哲学のゆくえ」山極壽一

主体と環境は切っても切り離せない

私は哲学者ではありません。人間以外の動物、とりわけサルや類人猿の生息地に分け入って、彼らの社会を研究し、そこから人間を眺めておこがましくも人間性についてずっと研究してきた者です。

なんでこんなところにおるかといいますとね。先ほど日文研の所長の井上さんが、梅原猛さんが初代の所長という話をされました。実は日文研も、人間文化研究機構という中に属する6つの研究所のうちの1つです。京都にあるもう1つが、私がいま所長しております総合地球環境学研究所というところですよ。私はゴリラとか日本ザルの研究をしながら、環境というものが人間を作った—しかも人間と環境というのは、一体化してこの世界を作ってきた、というふうに感じてきました。だから、これからの人間についての学問はやっぱり環境抜きにして考えられない。それに先ほど川勝さんが紹介してくれましたけれども、日本霊長類学の始祖である今西錦司、この方が1941年に書いた『生物の世界』という本の中で、主体と環境は切っても切り離せないものである—主体の環境化、環境の主体化というような言葉を書いております。そして自然学という新しい学問の中で実は、梅原さんと同じように、今西さんは、西洋の最もドミナントな思想に直接立ち向かった方であります。それはチャールズ・ダーウィンの進化論です。

ダーウィンが競争というものを中心に据えて、その中で適者生存、自然淘汰、性淘汰という、選択という概念を使いながら、そこでより優れたものが、子孫を残すことにつながっていくという説を唱えた。

これに対して今西は調和、適応、そして共存、そういうテーゼを投げかけたわけですね。これはずっと世間から、証拠がないじゃないかということで無視されてきました。しかし、昨年11月に、私はイタリアのベニスで、哲学者や社会学者、あるいは未来学者と一緒に議論をしたときに、中国のビン・ウォンさんという方と対話をしまして、今西さんの話を紹介しました。ビン・ウォンさんは北京大学を出た政治哲学者なんですけど、今西さん考えは中国の思想に非常に通じる場所があるとおっしゃってました。そしていまワンネス (Oneness) という、この地球のすべてのものは同じ1つのものから生成、発展したものであるから、お互いに調和する能力を持っているはずだという考えに行き着いている。これはまさに今西さんが言ったことなんですよ。そして、これは実は西田哲学の根本原理でもあります。そして、その今西の弟子、私の師匠である伊谷純一郎も、西洋のドミナントの思想に直接向かっていった人です。

“人間平等起源論”

彼が向かったのは、ジャン・ジャック・ルソーの人間不平等起源論です。人間はそもそも自然状態であるときには、他人に関心を持たず、お互いにそれぞれ独立して、平和で対等な関係を保って暮らしていたはずだと言っていたわけですが、伊谷さんはそうではないと、サルの段階ですでに不平等というものが現れ、ある社会秩序を保つルールを作ったんだ、と言いました。

それを克服すべく、平等へ向かってそれを抑制するさまざまなルールを立ち上げたのが類人猿であり、その継承者として人類の祖先がいるんだということを言い出しました。それも未完のうち終わっているわけですけども、その弟子たちは“人間平等起源論”という伊谷純一郎の説をどうやって証明したらいいのかということ、霊長類学と生態人類学という新しい学問の中で、盛んにやっているのが現実です。

私は、今西さんが当初、1950年代に考えた家族の起源という問題に、非常に興味を抱きまして、家族という世界で共通な、根本的な社会組織がどうやって生まれたんだろうということにずっと関心を持ってきました。

実は人間というのは、男と女の間には身体上のかなり重大な性差があります。人間以外の霊長類の中で、性差のある種でオスとメスがペアを組んで、核家族を作っている例はありません。オスとメスの体格が同じで、つまり性差がない種にのみ、核家族という社会構造が現れるわけですね。

人間の祖先も男と女に性差があることがわかってます。でも、それがなぜ現代世界の趨勢である核家族に行き着いたのかというのは大きな疑問です。その間に何があったのか。チンパンジーとの共通祖先から分かれて700万年間、人類の社会構造に一体何が起こったのかということがまだ解けていない謎です。

“慈悲の文明”

そして私は、梅原さんの西洋哲学に対する大きな疑問というのは、先ほど山折さんがおっしゃられた戦争という、そして縄文と弥生と都市文明との間のどれひとつも潰さなかった日本の歴史の中にあるのではないかと思ってるんですね。

梅原さんは実は西洋文明を“力の文明”と呼んでいます。日本の文明、中国から長江文明が移籍してきた日本の文明を、大乘仏教をその中に据えて“慈悲の文明”と呼んでいます。その慈悲の文明の中に縄文的な文化、これは美と浄の文化だと、浄というのは清潔清浄の浄ですね。その感性が、仏教の中にきちんと反映されて日本の文化が作られると言ってるんですね。で、今西さんも伊谷さんも私も、実はそういった文化が、人間の文化が現れる前の、言葉が登場する前の、人間がまだサルや類人猿と同じように、言葉以外のコミュニケーションで語り合ってた頃の社会性や人間性というものを捉えようとしてきたわけですね。

共感が社会力につながった

で、今日の山折さんも川勝さんもお話されなかったのは、西洋文明が「言葉の登場をもって、人間というものが作られた」というふうな原理を中心に据えていることです。でも、今西さんも伊谷さんも私もそうなんですが、人間性、人間の社会性というのは、言葉の前に作られたと思ってるんですね。

その根本原理は「共感」です。共感というのは、実は「弱みを強みに変える」という思想だったと思っています。人類の最初に獲得した人類らしい特徴というのは、立って二足で歩く直立二足歩行という変な歩行様式でした。これは、人類の祖先が、いまだに類人猿が住み着いている熱帯雨林を離れるのに役立ったはずです。

熱帯雨林を離れば、食物は分散していて、地上性の肉食動物がうようよしています。だから弱いものは安全な場所に隠れていて、屈強なものが遠くまで歩いて行って食物を運んで持って帰ってきて、安全な場所で食べなければなりませんでした。

その時に「見えないものを欲望する」という人間の初めての社会性が芽生えた。それを叶えてくれたのは直立二足歩行であり、食物が人と人をつなぐ大きな役割を果たした。

見えないものを欲望するということは、同時に共感性につながります。遠くに行っても見えない場所で何かをしている人たちが、きっと私の願いを叶えてくれのではないかという願い。そして隠れた場所で待っている仲間が期待している、自分がそれを叶えようとする思い、それがつな

がって、共感力が社会力につながった。これが人間の進化の第一歩なんですね。それからずっと人間は「弱みを強みに変える」という戦略でもって生き抜いてきました。

日本では米の文化に慈悲の文明が育った

それが、食糧生産が始まって、文明が起こってから、「強みを拡大し、強みをさらに拡大する」という戦略に転じてしまった。これが私は大きな間違いだと思っています。実は縄文というのは狩猟採集文化だったんです。先ほど、賢一郎さんや川勝さんがおっしゃいましたが、中国には長江文明があった。梅原さんがおっしゃっているのは、「力の文明」というのは小麦の文明だっというんですね。

長江文明は米作、米の文明でした。米を作るためには、森と、清浄な水の流れが必要だったわけですね。森と水というのが長江文明を作った。その子孫である人たちが黄河文明、小麦の文明に敗れて日本へ流れてきて、そして縄文と出会った。で、ちょっと前の理論では、弥生文化が縄文文化を駆逐したと言われていたんですが、実はこれは融合したと言われています。

近年のゲノムの分析から、弥生時代には25%の人たちが中国大陸から来た人たちだと言われています。そこに縄文文化が邂逅を果たしながら、どちらもそこで潰れることなく、日本文化というものを築き上げてきた。

先ほど山折先生が三層構造と言われたものが、日本の文化の本質に流れていると思います。日本は米の文化です。ですから、森も水も絶やすことなく、そして決して大平原という地域的な小麦文化に特徴的な地形を有することなく、日本の中央脊梁山脈から流れる数々の川が、米の文明を発達させてきたというのが、日本の文化に流れる基調なんだろうと思います。

その中に「慈悲の文明」が育った。梅原先生が喝破したような話なんだろうと思います。それがいま見直され始めているんですね。最近のジェームズ・C・スコットという歴史学者が書いた『反穀物の人類史——国家誕生のディープヒストリー』という本があります。その中で、食料生産、小麦の生産というのは、すぐに農耕文明に結びついたわけではない。4000年もの狩猟採集と農耕というものを行ったり来たりした人たちが、メソポタミアにはいたんだということを言っています。

それは小麦の文明というものがそれほど有利な文明ではなかったということを示している。そして最近、オランダのルトガー・ブレグマンという人が『Humankind 希望の歴史』という本を書いて、人間というのは実は闘争し合う本性を持っているのではなくて、利他という精神に基づいて助け合うことが人間の本質なんだということを言い始めています。

地球環境を傷めないで共存するために

現在、戦争というものを解決する手段は、どちらが勝ちか負けかという二元論で解決するしかない政治家たちは思い込んでいるようですが、そうではありません。実は西田哲学は間の思想と言われています。間の思想というのは、先ほどちょっと話がありましたが、山内得立さんがおっしゃられたインド発の、竜樹と言われるナーガールジュナが言い出したことですが、4つの

レンマですね。

最初は二元論です。肯定か否定しかない。でも、あとの2つ、両否定か両肯定という間を認めるような容中律という考えが東洋にはある。仏教がそれを伝えました。日本の中ではそれを反映させて、さまざまな景観や思想の中にその「間の論理」が浮き出しています。例えば、里山の思想、里海の思想。ヨーロッパの宗教にとって、森も海も悪魔の住みかです。だから、大航海時代にその海を乗り越えて、陸地を占拠するという領土の拡大を図った。でも、日本にとって海というのは、これは神様の場所ですから、鳥居を建ててそれを敬うという信仰がずっと続いてきた。

そして川勝さんは梅棹さんの「文明の生態史観」に対抗して、「文明の海洋史観」というのを述べておられますね。江戸時代に物産複合ということを根拠にしながら、節約ということを文化の基本に据えた。日本では鎖国時代に3000万の人たちが食べていけるような文化を育んだ。そういう思想が、いま地球の節約時代として必要になっている。地球環境を傷めない、そして人間同士が共存しながら、仲良く暮らしていくような方向に向かって歩まなければならない。だから、別に江戸時代をモデルにしようというわけではありませんが、人間が常に闘争し合う存在であるということ、もう一度見直す必要があるのではないかと思います。

ベーコン・ホブス・デカルト——近代をダメにした3人の思想家

私は400年前に出た3人の思想家が、近代をダメにしたと思っています。

1人はフランシス・ベーコン。ベーコンはキリスト教の上に立って、自然というのはそのまま置いておいても価値がない。人間が技術によって、それに手を入れて初めて価値のあるものになると言いました。ですから、産業革命の前に、ヨーロッパの森はほとんど刈り尽くされてしまいました。

もう1人はトマス・ホブス。ホブスはルソーの前に出た思想家であります。人間の自然状態は闘争状態だと言った。だから秩序をもたらすためには、人間が持っている権利を大きな権力に譲って、その権力によって平和をもたらさなければならないということと言った。いまの政治家たちは、ほとんどの人たちがこのトマス・ホブス派です。実はダーウィンは、そのトマス・ホブスの論理を自然界に当てはめて、それを一般論にしたと言っても過言ではありません。闘争ということがあまりにも自然であるということを考える思想がヨーロッパには根付いています。だから梅原先生はそれを力の文明、闘争の文明と呼んだわけですね。しかし、本当にそうでしょうか。

そして、そこに最後の鉄槌を振り下ろしたのがルネ・デカルトです。「われ思う、ゆえに我あり」と言った。でもそれは、主体はあるけれども身体はありません。考える精神だけがそこにある。それは目に見えない。人間の体をすべてこの世界の物質と同じ物理学の法則でできていると、彼は数学者でもありましたから、見なしたわけですね。

そのおかげで自然科学は、人間の体を物質として見立てて、すべてを物理学の法則に従うものとして研究してきました。それで医学は発展しました。物理学も数学も発展しました。それは現代の近代工学を生んだわけですね。

しかし、本当にそれでよかったんだろうか。実はいまのAI、人工知能というのは、デカルトの予言の通りなんですね。だって人工知能は実体がありません。実存もありません。しかし、考

えるという情報を絡めて主体を作っているわけですね。でもそれはすべてのものを物質として分析する機械です。おそらくデカルトが予言した通りになっていると私は思います。しかし、本当にそれでいいのだろうか。実は西田幾多郎も今西錦司も梅原猛も、ルネ・デカルトを批判してるんですよ。

梅原猛賞——人間の本性を見直し世の中を変える

今西さんは「われ感ずる、ゆえに我あり」ではないかといった。そして和辻哲郎も同じことを言っています。脳で認知する前に感ずるということがなければならぬだろう。身体が先であって、心は後であるということを行っているわけですね。

その考えにもう一度立ち戻らなければ、われわれの、生物と同じ世界に住んでいるという意識は生まれてこないだろうと思います。梅原さんの最後の言葉を先ほど川勝さんはおっしゃいました。戦争をするのが人間の実態である。しかし、この戦争を止めるためには、戦争は人間の本性ではないということ、われわれは確認し直さなければならないと思います。

戦争というのは、たかだか食料生産が始まってから出てきた、人間の最近の行為なんですね。ほぼ700万年という進化の時間の中の、わずか1万年に過ぎません。それは人間の本性ではない。人間はお互いに助け合うという本性の上に、この社会を築き上げてきた。

そこにもう一度立ち返って、「本来の人類哲学」というものを、この世の中に浮かび上がらせなければならないのではないか。そのために梅原さんは最後の予言をされた。人類哲学序説というものです。そこに立ち返って、われわれは哲学を志向する者も哲学ではない分野の者も、やはりこの世の中をもう一度、「人類」という視点から考え直すという時期を迎えているのではないかと思います。

この「梅原猛人類哲学賞」というのは、そういう人たちを表彰し、その思想的な動きを、背中を押しながら、この世の中を変えていく動きにつながればと私は思っております。あまり時間もありませんから、私のおしゃべりはこのくらいさせていただきます。どうもありがとうございました。（拍手）

小西

山極先生、どうもありがとうございました。

客席前列に座っておいでの方から、3人の先生方にコメントをいただいて、3人の先生方にまた一言ずつ応答いただくということでお願いしたいと思います。

ではまず山折先生お願いします。

山折

ただいまの三先生の熱のこもった、深い、そして広いお話を伺いまして感動いたしました。

さて、困ったなあ。（笑い）……コメントする隙間もないような、お三方それぞれ精密にお話になられた。だけどひとつだけ、申し上げさせていただきたい、お聞きしたい問題がございます。

冬眠文化の行く末

去年でしたか、熊が出たんです。熊が出て、檻の罠にかかった鹿を食い始めた。これは栃木県の日光市。それで研究した方々が、農工大をはじめとする本格的な調査チームだった。それが自動カメラで長期間映していて捉えた現象で、折にかかった鹿を、熊が夜中に何度もやってきて食い散らしていた。

日本の社会のみならず、日本の山林、あるいはそれにとどまらず、食の環境に大きな異変が起こり始めている—こういうコメントが出ていた。私はその記事を見て直感的に思いましたのは、冬眠文化が崩壊し始めている。冬眠という問題であります。辞書を見ますと、私は知らなかったんだけど、ハイバーネーション、ハイバーネイトという、冬眠するっていう動詞がある、その意味は避寒するというのがひとつですね。寒さを避ける、引きこもるという意味がある。「おおっ」と思ったんです。冬眠文化というものは、熊のみならず昆虫に至るまで、ものすごく多くの生き物たちの生活の重要な基盤だった、ということを専門家が書いています。そうすると日本人の大多数が長い時間・時代、冬眠生活・冬眠文化の中で生をつなぎ、森を守り、社会の秩序を守ってきた。

さらに言えば、このハイバーネーション—冬眠という生き方の底にあるものは、休息を取る。休眠する。それはひいては、激しい労働を一時止めたり縮小したり、コントロールしながら生きていく、そういうもう1つの生き残りの能力、社会を背景に持っている。そう考えたんです。

それに比して今日のわれわれの社会はなぜか「冷凍文化」ですよ。冷凍食品、冷凍なにになに、冷暖房、人間の精子・卵子まで、冷凍して保存する。われわれは冷凍技術を抜きにして、一日も生きていけない世界にいま追い込まれている。そのときに、日本のみならず、世界の人類を今日まで生き長らえさせてきた根本のところ、冬眠という問題があった。冬眠文化という世界があった。こう思った。人類は豊かな余暇を手にするはずだと多くの識者は言ってきた。AIが出現することによって、人類は余暇、休暇、精神の休息、豊かな余暇を手にするはずだと多くの識者が言ってきた。現実はどうですか？ 冷凍文化の中でどっぷり生きているじゃありませんか。今日のこの部屋だってそうだ。冷暖房の施設がなければ、われわれは話もできないような状況に追い込まれているんです。

これからの重大問題は冬眠文化だと。その定義の中に2つの条件があるんです。冬眠文化を生き抜くためには。1つは、寒気に耐える。寒さに耐える、これが人類何千年、何万年の間に経験した最重要の1つの要素。2つめが食物を節する。場合によっては絶食する。寒気に耐える、食料のコントロールに耐える、この2つに耐える文明が、冬眠文化だと。これからの重大な研究課題であると、私は最近思うようになったんでありますが、できれば最後にこの問題についてお三方に伺いたいと思うのであります（笑）。失礼いたしました。（拍手）

小西

山折先生、ありがとうございました。

それではこの非常に大きな問いかけにつきまして、座られている順番で応答いただきたいと思います。まず梅原先生、いかがでしょうか。

梅原

山折先生の冬眠の話ですよ。冬眠からすごくイメージ豊かな話を展開されたと思うんですけども。これからは発達とか、上昇とか、そういうのを期待できないというのか、そういう思考をやめていかないといけないという、持続可能という言葉も、ちょっと甘いような気がしますね。

そういう中で寒気に耐えるとか。摂食するとか、厳しい言葉ですけども、これからそういうものを覚悟して生きなければいけない、という優等生的な答えですね。しょうもない答えで申し訳ないですけども、これからそういうことも考えなきゃいけないなと思いました。以上です。（拍手）

小西

ありがとうございました。それでは、山極先生お願いいたします。

山極

たぶん、これは僕が一番答えやすいと思うんですよ。動物学をやっていますから。クマが冬眠できなくなったのは2つ理由があります。1つは秋の食べ物が少なくなって、冬眠できるまで脂肪を蓄えられなかったということがあって、もう1つは地球の温暖化で隠れる場所、特に雪道を掘って眠るんですけど、そういう場所が見つからないという2つの理由があるんです。人間も、まったくその通りなんですよ。

シベリア方面に進出できたのはホモサピエンス、つまり20~30万年前に出てきた人類、しかもこの数万年に過ぎないんですね。ベーリング海峡を渡ったのは1万数千年前ですから極めて最近で、人間は冬眠、つまり熊のような眠りこけることはしなかったけど、冬眠と同じように冬に立てこもる場所を確保してきた。

私はロシアに行ったことはありませんけれど、イギリスの北部に冬場行きまして、あの冷たさと恐ろしい風に、なんで人類が耐えてきたんだろうと思いました。なぜ彼らが石の家を好んだのか、それは密閉し、中で火を焚くのに適していたからですね。そこに冬場閉じこもって、あの冷

たい風の中でほとんど狩猟なんかできず、秋場に蓄えたもののみによって生きながらえた。

日本の北部もだいたいそうですね。秋のうちにさまざまなものを溜めておいて、冬はなるべく外に出ないようにして、その蓄えをもとに暮らしてきた。これはまさに冬眠と同じような生活をしてきたわけですね。でも、そこに余暇があり、さまざまな知恵が浮かび、生きる力がそこで湧いてきた。そういうものがまた明るい春・夏・秋と人間が活動するのに多くが踏み台として役立ってきたはずなんです。

隠居制度とAI

日常生活においても、実は余暇の多い暮らしを送ってきたはずですよ。土農工商という身分制度があった江戸時代でも。そして、そこには隠居制度というのがあった。私はこの隠居制度がいまなくなってしまったのは、日本の家屋から縁側が消えたせいだと思ってるんですけどね。

年をとっても、いつまでも自分の権力にしがみつくと人が多くなった。そうじゃなくて、やっぱりある程度の年齢を超えたら、それまでのギスギスした壮年時代の生活から足を洗って、花鳥風月、趣味に生きる。そして笑いの多い人生を送るとというのが、日本の隠居たちの楽しみだったはずですよ。それに壮年時代、あるいは少年時代の子供たちも憧れたっていうことがあったはずなんです。いまそういう隠居のような冬眠生活ができなくなった高齢者たちが、あたりをさまよい歩いているというのが現状なんじゃないですかね。これはまさにクマと同じですよ。冬眠する場所がない。しかも花鳥風月を楽しむ材料が与えられていない。本来ならそれをわれわれは——私ももう高齢者ですから——探さないといけないんですが、そういう社会の隙間がどんどん狭まってしまって、おっしゃるようにAIができたなら余暇ができるはずだったのに、どんどん忙しくなっている。いずれは高級な職業はAIが代替し、下級の肉体労働は人間がやると、まさにAIによる奴隷みたいな暮らしが起ころうと予想しています。

そうならないためにも、人間がAIを操作しながら、AIにはできない世界を確保しなきゃいけない。AIにできない世界はなにかと言うと、個性と美的感性です。美的感性だけは、AIにはたぶん持てないだろうと思っています。

それがまさに文化であり、それを縄文以来作り上げてきたのが日本の文化だと思います。それを手放してはいけない。いま、利便性とかいう名前ののもとに、われわれ高齢者がだんだん美的感覚を手放しつつあるというのが、一番危険な状態ではないかと思っています。山折先生はまだそれを手放しておられないので、今日もあの素晴らしいお服でおいでになりました。

そういう日々の感性に満ちた生活——私はだいぶ前になりますけど、日本文学を研究されたドナルド・キーンさんという元アメリカ人の学者と対談をいたしました。この方が言っておられた言葉がすごく心に残っていて、それは日本という国は過去を捨てていない国だ。ローマもパリもロンドンも過去の遺跡が残っている。だけど、日本は遺跡ではなくて、日本人の暮らしの中に、平安時代の暮らし、室町時代の暮らしというのが色濃く残っている。こういう文化は、世界広しといえども、ほぼ日本にしかないんじゃないかということをキーンさんはおっしゃっていて、なるほどなあと思いました。

ローマ人はガチョウの羽ペンで字を書いたりしませんけれども、日本人はまだ毛筆で字を書いていますよね。そして和服を着ます。和食を食べます。日本の庭も室町時代の庭が残っています。

それをわれわれは愛でる心を失っていない。

そういうものが日本の文化の根底に、山折先生の言葉を借りますと、重層的に流れているというのが、まだわれわれがよって立つ——冬眠とおっしゃられましたが——日常生活から離れて、感性にふける心や隙間を持っているという、宝石のような財宝じゃないかなと思っておりますので、冬眠しましょうということを最後に申し上げたいと思います。（笑い、拍手）

小西

ありがとうございます。それでは川勝先生、よろしく願いいたします。

川勝

今西錦司さんの棲み分け論

冬眠から目覚めるのは春です。今日は春分の日で、これから日が長くなります。やがて夏が来て、秋が過ぎ、冬至になると日が短くなって活動時間が少なくなり、冬眠。自然界は、春は花咲き、夏祭り、秋は紅葉の錦織の四季があるのに、人間は最新技術で季節を無視した生活をしているのは、どこかおかしい、人間よ、自然を忘れたのか、というのが山折先生の問いかけではないでしょうか。山折先生は冬の厳しさを言われましたが、兼好法師は「夏の暑さは耐え難い（『徒然草』）」と。冬の寒さも夏の暑さも厳しいですが、冬には冬らしく生活せよ、というメッセージとして承りました。日本は四季に恵まれているのにコンクリートの中で生活していると季節を忘れがちです。自然界に接して、ああ、春が来た、秋になった、ああ、富士山に初冠雪など、四季に応じた生活をするのが大切だと思つづく思います。

食についていえば、冬眠は絶食することです。山折先生は、死に方について、餓死という表現が厳しいですが、絶食を考えられています。実際、西行が、望月の日に花の下で死ぬと決め、それを実行したように、食べない訓練、絶食をしたのです。飽食の時代とは異なる倫理観をもて、というメッセージでもあります。熊やイノシシの話は棲み分けが乱れているということでしょう。今西さんの「棲み分け」論がいかにか大切にすることを改めて感じます。

ゴリラの笑いと菩薩行

今西さんの直系のお弟子さんの山極さんは、ゴリラは森の中の優しい生き物だということを明らかにされた。山極さんによるとゴリラは笑う、声をたてて笑い、子供と遊ぶ。強い社会的父性をもつ巨大なオスが子供のゴリラと遊びを楽しむ。笑い遊びは大事です。戦争になると、笑いも遊びも奪われますから。ゴリラから見て戦争は間違っている。戦争をする人間はゴリラに笑われます。

梅原さんの笑顔は素晴らしかった。梅原さんは、笑いの研究をしていくうちに、仏像の微笑に出会った。仏の笑いは、吉本の笑いとは違う。あまりにも大きな落差。仏の笑いは何なのだと。仏像はすべて、そして翁も笑っています。おじいちゃん、おばあちゃん、性差がなくなって

笑顔になる。笑いがいかに大切か。これを宮沢賢治さんが「雨ニモマケズ 風ニモマケズ 雪ニモ夏ノアツサニムマケヌ 丈夫ナカラダヲモチ」に続けて、こう言っています、「慾ハナク 決シテ瞋（いか）ラズ イツモシヅカニワラツテキル」。

仏さんのことだと思います。煩惱はなく、おこらないで、静かに微笑んでいる。東に病気の子供があれば行って看病し、西につかれた母があれば行ってその稲の束を負う。死にそんな人があれば行ってこわがらなくてもいいよ。北に喧嘩や訴訟があればつまらないからやめなさいと。これは利他行、菩薩行です。菩薩行の前に「いつも静かに笑っている」という仏が置かれているのが本当に大事だと思います。

力の文明から慈悲の文明へ

宮沢賢治は花巻出身ですが、（棟方）志功、賢ちゃん（宮沢賢治）、哲ちゃん（山折哲雄）、たけちゃん（梅原猛）、みな東北の縄文の世界に縁のある人ばかりです。根っこの風土というのはすごい力をもっています。

こちらの賢ちゃん（梅原賢一郎）は、先ほど、財団の方向としてOSや対話、そして最後に祭り・芸能・芸術と言われました。なぜ京都は先の大戦で爆撃を受けなかったのか。爆撃されたという人もいますが、基本的に京都の町は破壊されなかった。どうしてでしょうか？ 京都は魅力があるから壊せなかったと思います。京都の歴史風土の蓄えている美、芸術性、文化力が軍事力に打ち勝った。

日本の文化力のエッセンスは芸能・芸術に謳いこまれています。それが梅原さんのいわれる「草木国土悉皆成仏」、すべてのものに仏性があるから、杜若、芭蕉、鶴などの仏性を擬人化して能楽師が謡い舞う芸術になる。

西洋の神が、理性のコントロールする自然科学になったとすれば、日本の仏は、仏性が人の表現力を借りて芸術に転化した。西洋が科学革命を起こしたのに対して、日本は芸術革命を起こした、そこまで猛先生がおっしゃたわけではありません。ただ、梅原さん晩年の世阿弥の謡曲へ入れ込みようは尋常ではありません。芸能・芸術は人を感化し、人を幸せにし、人を喜ばせる。これはプラトンが『国家』で論じた理想です。人を幸福にし、正義を実現するために国家はどうあるべきかを考えたプラトンの理想を、無自覚ながら日本が実現していた。梅原先生は概念的に語ってはおられませんが、研究対象とされたる能・狂言・円空などを通して語られています。

私は山折先生にはいつも感化されていますが、先生のパクス・ヤポニカ論ですが、日本は多くの外国の恩恵を享けてきた国です。しかし、相手に染まり切りません。キリスト教は普遍性を主張しますが、信仰が自由な日本で信者は150万人くらい。外国由来の普遍文明の限界が明らかになるのが日本の国柄だと思います。外国の普遍文化が日本に受容されると、写し鏡のように、その個性、個別性、限界が明らかに見える。すべての文化が所を得て仲良く生きられる術をもつのがパクス・ヤポニカの本領だと思います。

賢治さんの「なめとこ山の熊」の小十郎は、熊を殺すのが仕事です。最後に自分の身を熊に捧げる。そこまでやれる人はいないでしょうが、現在、熊や鹿やイノシシを頭数制限の名目で殺しています。いかにして動物たちと棲み分けるのか、その方法を山極先生に考えていただきました

い。文化力では賢ちゃん（梅原賢一郎）、棲み分けでは寿一ちゃん（山極寿一）、期待しています。（笑い・拍手）

小西

ありがとうございました。この議論はずっと聞き続けていきたいところなんですが、お時間も迫ってまいりましたので、閉じさせていただく方向に進みたいと思います。

私からまとめるというのはおこがましいんですけども、一言だけお許してください。このフォーラムは、「これからの梅原猛」というタイトルがついております。私自身は1980年、昭和55年生まれで、決して若くはないんですが、梅原猛先生のたぶん孫世代に当たりますし、直系ではないんですが、私も人類学をやってまして、今西錦司先生から数えて4世代目に当たります。そういう世代にとってみれば、梅原猛先生とは仰ぎ見るだけの存在であって、でもそれをどのようにこれからの40代以下、20代30代が受け継いでいけばいいのかということを考えながら、お話を聞いていました。

私は梅原先生の本を読むといつも元気になるんです。ワクワクします。本当に心を揺さぶられるという経験をします。で、私自身はその他にも、今日ご登壇の先生方の本を拝読しても、いつもワクワクするし、元気になるという感覚を持っています。

私自身は学術や学問というのは、人類に活力を与えるものだと思ってやっています。その活力の源というのは何かというと、もしかしたら梅原先生がよくおっしゃってた、というか本にもよく出てくる借り物ではない言葉で語るということ。借り物の言葉では語らないということ。しかもそれが独りよがりではないということ。その言葉こそがすごく力を持っている。それがどこから出てくるのかというと、やはりロゴス以前のパトス的な部分、感情であったり、共感であったりという、ある意味、非常に人間らしいところからその言葉が出てきて、そういう言葉こそが、世代を問わず、人の心を揺さぶっていくんじゃないか、そういう部分はこれからの世代がまさにエッセンスとして受け継いでいくべきじゃないかということを考えながら、今日聞かせていただきました。本当に貴重なお話、貴重な時間だったと思います。どうもありがとうございました。（拍手）

司会

それでは、本日の議論をあの世でお聞きになって、おそらくニカッと笑っておいでであろう梅原猛先生と、それから本日ご登壇いただいた5名の先生方に大きな拍手をして終わりたいと思います。ありがとうございました。（拍手）